

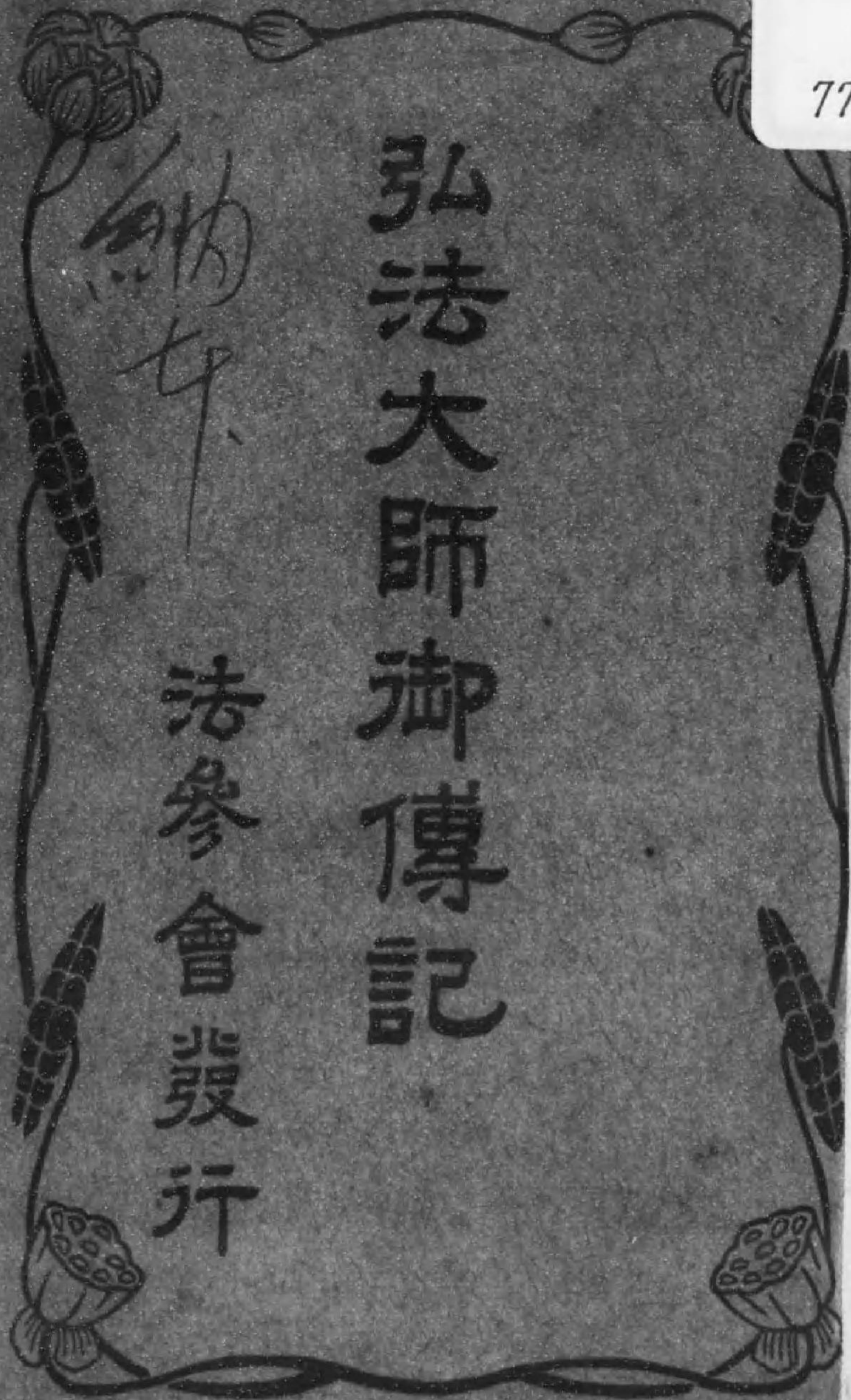
特114

779

弘法大師御傳記

法參會發行

納女



始



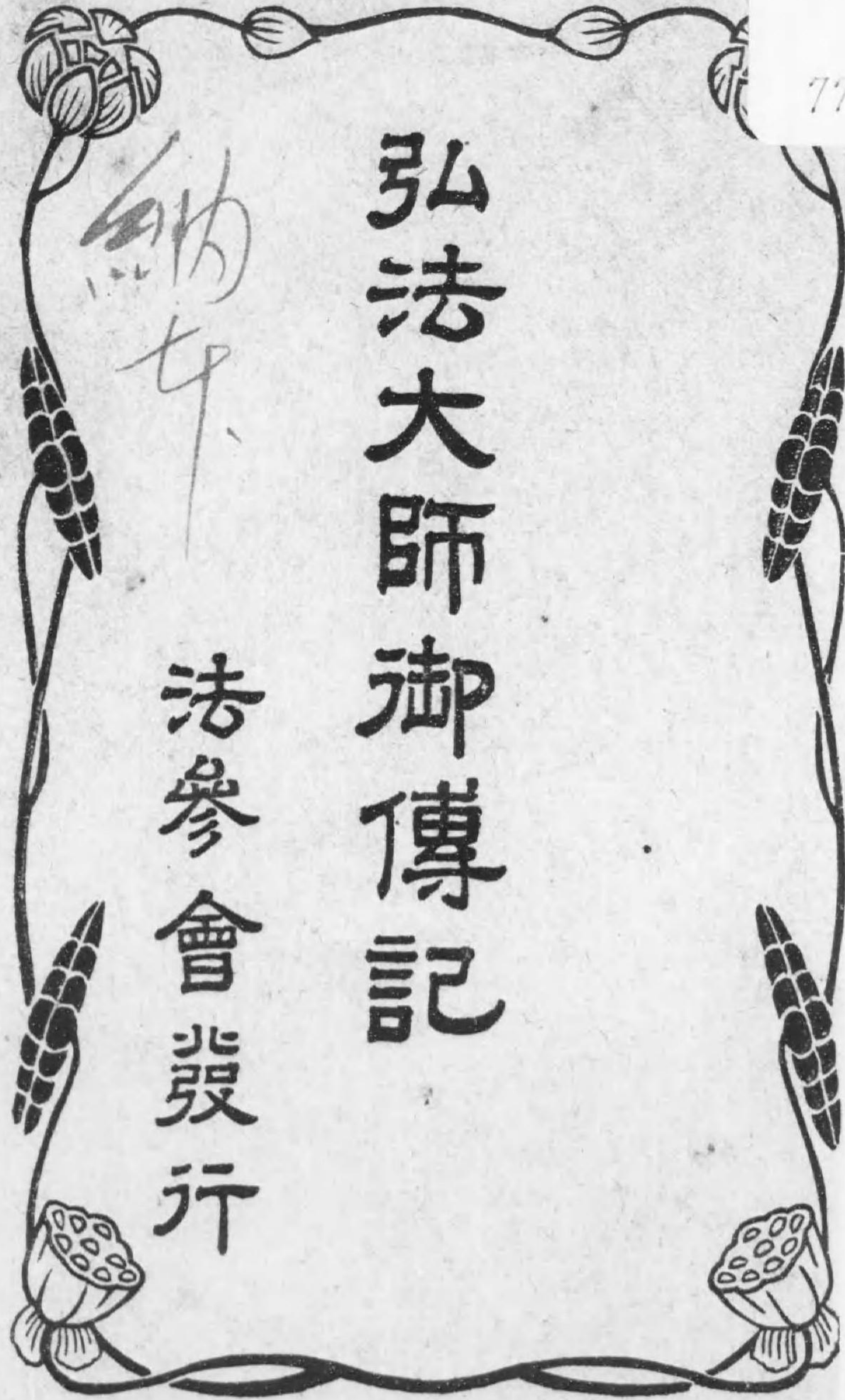
特114

779

弘法大師御傳記

法參會發行

納女



特114
779

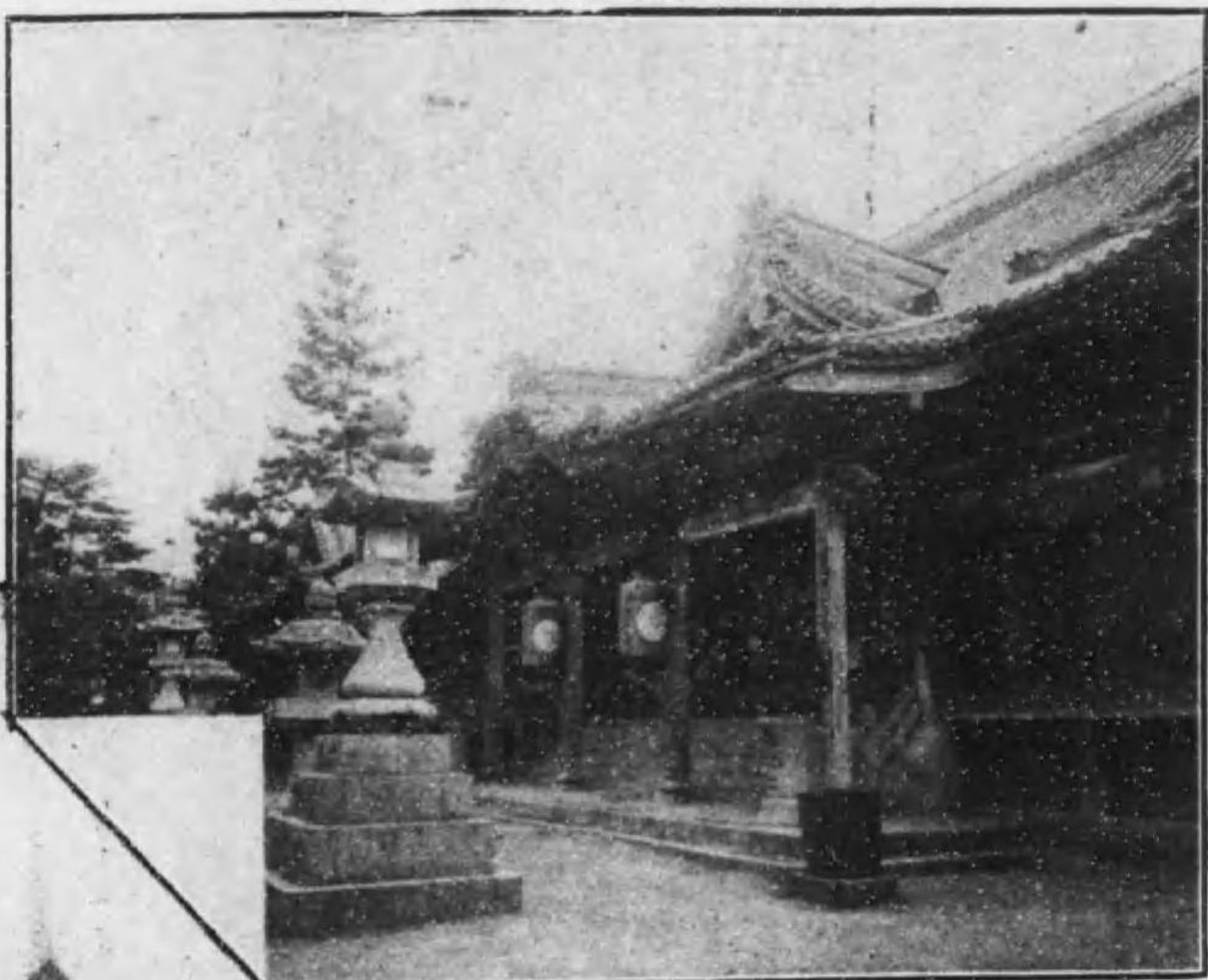


作公長通父叔師大 像尊兒師大法弘
置安寺通善浦風屏所生誕師大



1086225

堂影御寺通善浦風屏・所生誕御師大法弘



師大法弘寺通善
井湯産御の生誕御

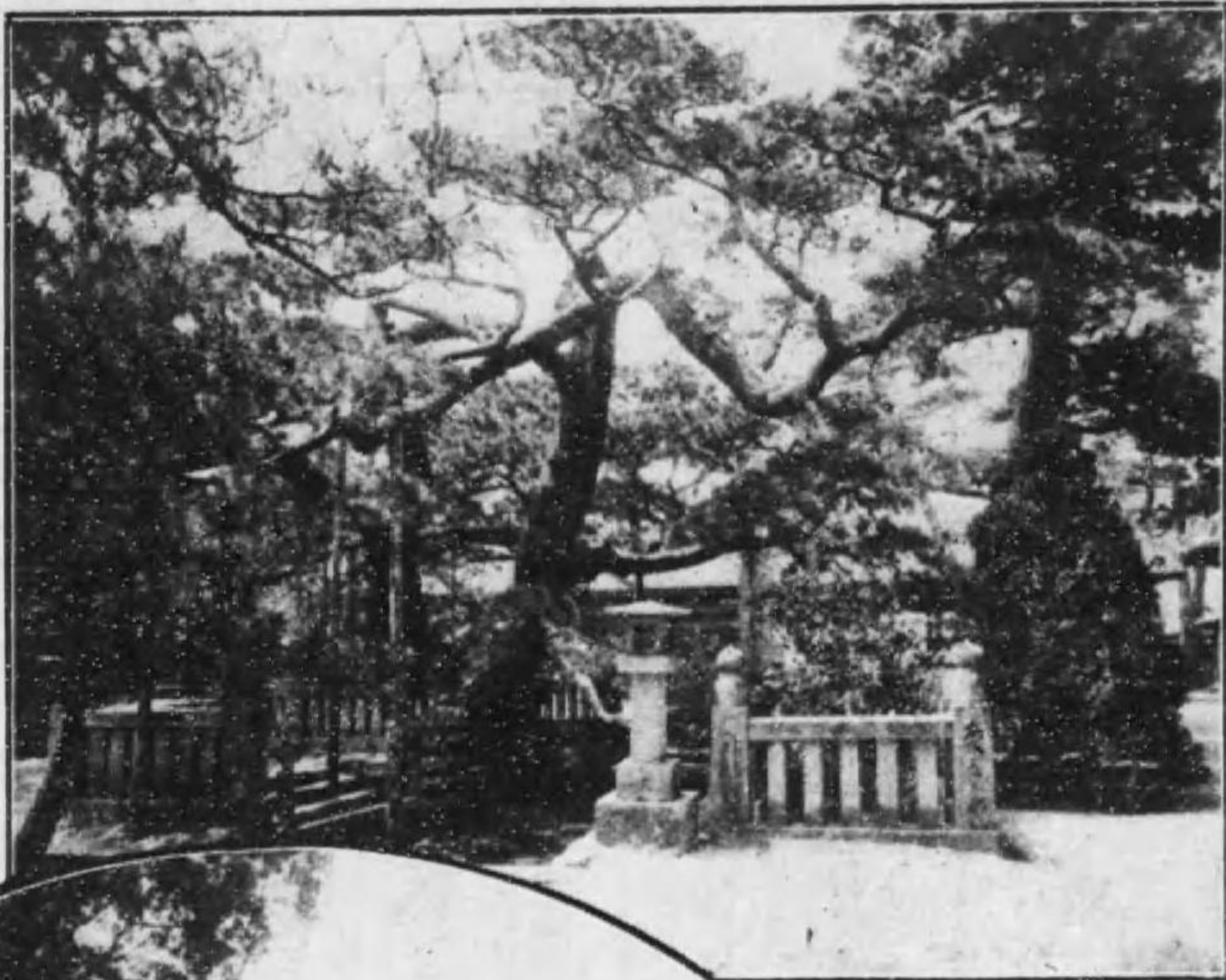


屏風浦善通寺
仁孝天皇勅願
五重大塔

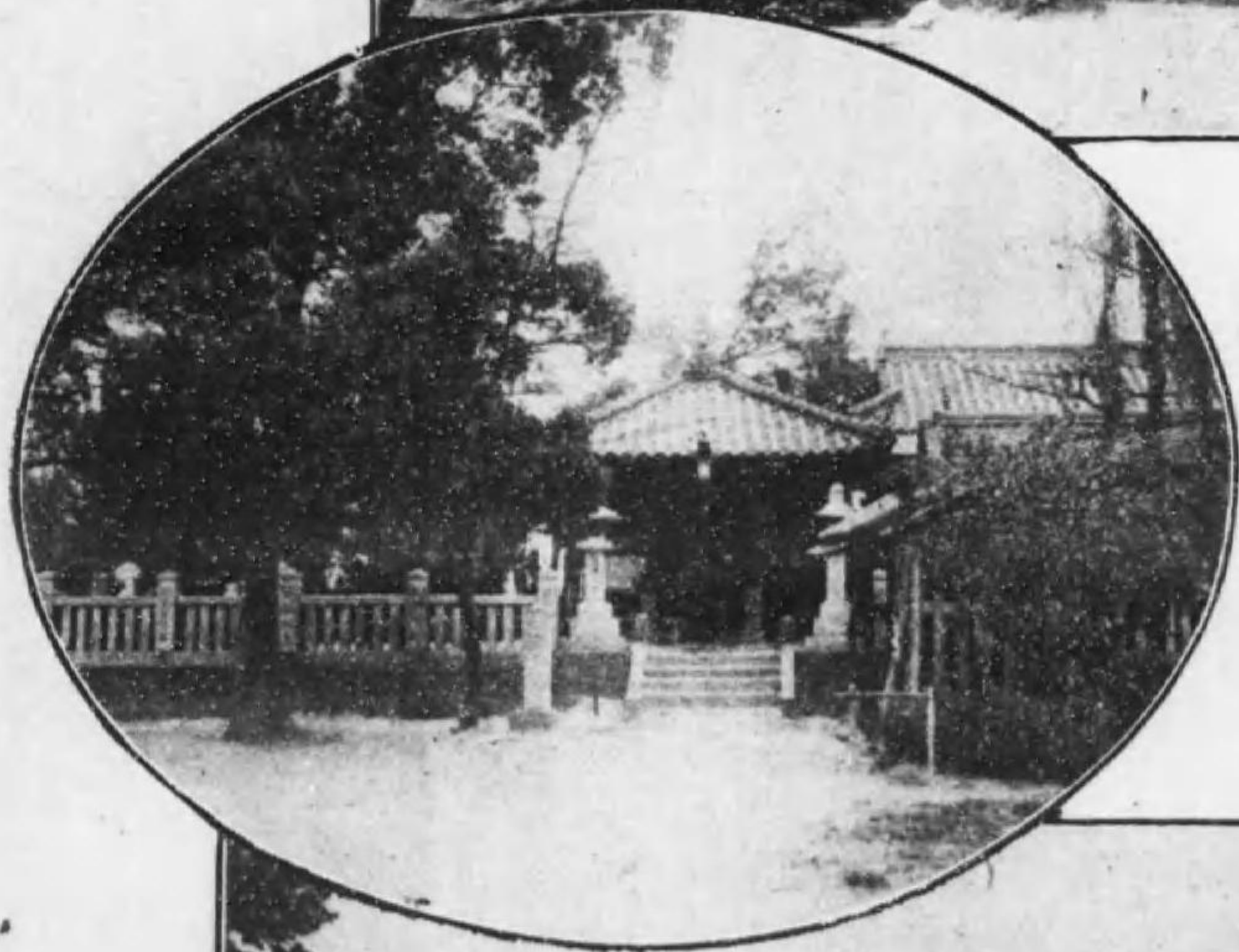
弘法大師御真蹟いろいろ歌



弘法大師御誕生所屏風浦善通寺遺蹟



御影の池井に同松



弘法大師御幼稚の時遊戯の靈地屏風浦仙遊ヶ原



御父佐伯善通卿祖廟

弘法大師御傳

佐伯宥榮編述

い、佐伯家

今から凡そ一千百五十年も昔、光仁天皇の御代、讃岐國多度郡屏風ヶ浦に佐伯直田公と申すお方がございました。

佐伯家は神代からの古い豪家で、御先祖は實に高皇產靈尊の御子天忍日命であります。この天忍日命から四代目を日臣命といひ、神武天皇御東征の砌り軍功を樹てられ道臣命といふ名を賜りました。十代目武日命、また日本武命の東夷征伐、に從つて大功がありましたので讃岐國を興へられました。武日命の子武持連並に其の子室屋は共に大連となり。殊に室屋に五代の朝廷に仕へて譽れが高かつたので

佐伯家

あります。室屋の子御物宿禰の姓を賜はり、御物の子倭故連初めて讃岐國造となり其の子歌連の時から佐伯と名乗るやうになりました。ついで平曾古、平彦、伊能連を経て大人の代になつて國造の職を退かれました。大人の次が檜波都、檜波都の子が男足、その子が即ちこの田公どのであります。

田公は又善通卿と申した方、天忍日命から實に二十二代目の御孫に當り由緒正しき御家柄とて、土地の人々は佐伯家を敬ふこと一通りでなかつたのであります。随つて御一族も多く、早くから都へ上つてそれ〴〵重い官職を務めておられましたが、唯り田公は名も位も求めず、只管四邊の風景に親しみ平和な月日を送つて居られたのであります。よく「偉い人は山水の風景雅い土地に生れる」と申します。が、まこと此の屏風ヶ浦の松青く波靜かな所から、弘法大師がお生れになつたのでござります。

ろ、御誕生

田公善通卿の一家は、まことに信仰の御心篤く、常に神佛を崇め敬ふこと一方ではありませんでした。然るに夫婦常に社會萬民の爲に種々慈善事業を爲すと雖ども世界の哀なる状態を見て力の及ばざるを悲み、吾一國一家を治むるには兄ありと雖ども是より世界の一切衆生を濟度する菩薩兒を與へ玉へと、佛天に祈誓を爲す事久しかりしに、ある夜のこと善通卿の夫人玉寄御前は、天竺から聖人が飛んで来て、吾は三地の薩摩なり衆生濟度の爲暫く汝の懷を借らんと、ツと懷に這入つた夢を御覽になりました。でこの由を夫善通卿に御物語りになると、善通卿も亦同夜、同じ夢を御覽になつたと申すので御夫妻は互に夢の不思議なのに打ち驚かれました。それから間もなく玉寄御前は尋常ならぬ御身となり、聽て月満ちて安々と御生れになつたのは玉の様な男の御子で、これが我國眞言宗の開祖弘法大師空海上人のご

といます。時は光仁天皇の寶龜五年甲寅六月十五日。大師は實に十二ヶ月胎内に在つて御出生になつたと申し傳へます。斯様な靈夢でお生れになつたのでありますから、一家の喜びは譬へる物もない程で、皆御佛の再來であるとして鄭重に取扱はれたのであります。

當時の佐伯家は他家の依據となり萬民の手本と仰がるゝ家庭でありました故に、御祝に来る人々日毎に多く、善通卿御夫妻も玉の様な御子を抱いて御顔も晴れやかに、佐伯の御邸は一時に花開き鳥歌ふやうな楽しい日を迎へられました。此の頃法進和尚と申す唐國の上人が、日本の國々を巡つて、この讃岐に參られ、佐伯家の御家中の家に泊りになりましたところが、夜中陀羅尼經を讀むやうな大師の泣聲を聞いて不思議に思ひ、習朝善通卿に面會して色々物語の末「この和子は性來大徳の相がある。行く未必と天下を安める大聖人とならう」とて、嬰兒を三拜して立去つたといふことであります。

大師は善通卿の二男で、御幼名を眞魚と申しましたが、物心つくに従つて何となく氣高くありましたので、人々其の名を呼ぶものはなく、皆貴物君と申しました。御両親も「我子ながら我子でない。全く佛性の子である」と、人々がいふがまゝにこれから貴物貴物と呼びになつて、大層御鐘愛になりました。此の邸趾が今の屏風ヶ浦善通寺誕生院であります。

其の御詠歌に

我すまばよもきえ果てし善通寺

ふかき誓ひの法の燈

は、を、さ、な、時

貴物君五六歳の頃でありました。毎夜のやうに八葉蓮臺に坐つて、諸菩薩と物語りする夢を御覽になりましたが、このことは幼い御自分の胸に秘めて誰にもお話に

ならず、御兩親にさへお打明けになりませんでした。そしてこの事一年あまりに及んだといふことであります。御自身にも不思議に思ひ、且つよく佛縁の深いことを御覺りになられたのであります。

明けて寶龜十一年七歳の御時、深く心に頼む所があつて、或る朝未明に邸を脱出で、其の西北に聳へる筆の山へと登り、遙か西の方を俯し拜んで頻りとお祈りになりました。

「私は如來の御弟子となつて、吾本願の通り衆生一切を濟度し盡さんと欲ふ。よつて今すべてを如來にお任せして、此所に身を捨てます。倘し私に其の力量がありますならば、此の身を救はせ給へ。若し又此の願ひ成就しがたいならば、此の身を如來に供養致します。」

と一心に祈誓を置めて、遂に千仞の谷底へと御身を投げられたのであります。このいぢらしき祈りに忽ち御佛の御感應がありまして、不思議や御身體には何事も

なかつたのであります。此の時東雲の光明一段つよく照り渡つて、雲間に尊き釋尊の御姿をお拜みになりました時。微妙の御聲あり汝の願ひ成就すと仰せられたり。貴物君思はずその有難さに幾度となく伏し拜んで佛恩を謝されたと申します。夫れ故か此の山寺を我拜師山出釋迦寺といひ、今は四國靈場の七十三番となつて居ります。

廻りあはん事の契りぞ頼もしき

嚴しき山の誓ひ見るにも

とは彼の西行法師が此の山に參詣して詠まれた歌であります。

此の頃から貴物君は佛を尊び、日常の遊びにも佛事を好まれました。そして毎日邸の傍の野原に出ては枯枝や小草を蒐めて、佛堂寶塔などを作り、花を供へ水を手向けて獨り樂しむとせられました。或る長閑な日でありました。例の通り野原に出て遊んで居りますと諸國の視察を仰せ付けられた觀察使がこの原を通りかゝりま

したが、貴物君の姿を認めるや驚いて馬より飛び降り、合掌禮拜して、
 「この和子は神童である。四天王が天蓋をさして身邊を護つてゐる。まことに珍らしきことである。定めし前世からの御佛で御座らう」
 と申して頻りに敬ひながら通り過ぎました。人々此の事を聞き傳へて忽ち神童の名が高まつたといふことであります。此原を仙遊ヶ原と稱し今は第十一師團練兵場中にありて日夜香花の絶ゆる事なく參拜しつゝあり、世界廣しと雖ども恐らくは練兵場中に佛堂のあるは奥ゆかしきの限りなり。

に、學の業

貴物君はもう七歳の頃から學問に御熱心でありましたが、一を聞いては十を覺るその賢さは、つねづね家人を驚かせました。

御年十二の折、近く姉上千枝姫が同國瀧の宮の宮司萱原氏に御嫁入のこととなり

ましたので、京から叔父に當る阿刀大足といふ方が參られました。阿刀氏は佐伯の一族で早くより京に上り、阿刀の宿禰の姓を賜はつて、一門大に繁榮えてゐられました。善通卿の夫人即ち貴物君の母上は、大足太夫の御姉に當られます。大足は有名な學者で、桓武天皇の皇子伊豫親王の學士となり、從五位下に叙せられた人であります。或る夜のこと、父善通卿は貴物君を一室に招んで、誕生當時の前兆の目出度かつたことなど物語り、さて容姿を正して、
 「斯様に佛縁ふかき御身ゆへ、よき師を求めて佛弟子にさせたく思ふが、御身の考へは如何に」

と、いと優しくお問ひになりました。貴物君も先き程からちつと御父上のお話を聞いてゐられました。此の佛弟子にさせたいとの御言葉を聞き、

「疾うから私も望んでゐたところでございます。」とさも嬉しげにお答へになりました。これを聞いた御兩親の満足喜悅は、此の上も無かつたのであります。居合せ

た大足太夫は貴物君の才を惜しきことに思ひ、
「假令佛弟子となさるにしても、一通り文學を修めさせてからにせられては如何、
文學は僧俗何れにも必要なことは申すまでもなきこと、せめて貴物十五歳にもなら
ば子が引受けて十分教育を致さう」との親切なる勧めに、御兩親も遂に此の方の言
葉に従はれることとなりました。そして師を聘へて論語孝經等の文學を學ばれたの
であります。天性伶俐の上に、至つて御熱心なる貴物君のことゝて、其の御上達
は實に驚くばかりでありました。

ほ、洛の叔父

延暦七年、大師は十五歳となりました。四年の間師に就て熱心に勉強いたされた
ことゝて、最早普通の學科は悉く修められました。そこで叔父上を頼つて京に上ら
うと、この事を御兩親に相談せられました。素より御兩親も異存のあらう筈は無

のですがさりとて日頃蝶よ花よと愛で育てた愛兒を、遠く都に上らすことは案ぜら
れもし、又悲しくもあることゝて容易に許されなかつたのであります。大師の熱
心な頼みと、慰めの言葉に漸く御兩親も御承知になりました。そしていよく大師
は一人の供人と共に、御兩親を初め御一族の人々と、盡きぬ袂れを惜ませられ、年
頃日頃住み馴れた故郷を後に、花の都を指して修業の途に登られました。此の事を
聞き傳へた村人は皆その門出を見送つて深く訣れを惜まぬものはなかつたのであり
ます。

かくて道中恙なく、長岡の都に入り阿刀家に着きますれば、叔父上は喜び迎へて
何くれと旅の疲れを慰めくれたのであります。一日叔父上は大師を伴ひ都大路を其
所此所と案内してくれましたけれど、物珍らしき都の有様も一として大師の眼には
入らず只管佛の道にのみ心を向けらるゝのであります。これより亦叔父上に就て
儒學を修むること約三年、學大に進み、師なる叔父上も其の非凡の才能に驚かれた

のであります。で、叔父上も何時まで自分の手許に置いて、不十分な教育をするよりも、早く大學に入れて完き教育を受けさせんものと大師に相談すれば、大師も素より望む所として、早速承知してこれより大學に入學することとなつたのであります。

へ、大學に

當時長岡に奠都して間もないこととして、大學はまだ舊都の奈良にありました。そこで大師は叔父上に連れられて奈良に到り、叔父上の知人である岩淵寺の勤操僧都を訪問れました。

勤操僧都は大和高市郡の人で、十二の時奈良大安寺、信靈和尚の御弟子となり、十六歳の時東大寺に入つて三論宗を學ばれました。二十一歳の光明天皇の勅で宮中と山階寺とで一千人の僧を得度し、弘仁元年大極殿に最勝王經を講れました。ま

た宮中紫宸殿で各宗の高僧方が集つて、各々宗義を論議された時其の座主となつて盛んに三論宗の宗義を説いたこともあり、陛下の御覽も目出度く、徳望また一世に高かつた大徳であります。

應て兩人は案内されて一間に通り、待つこと少時するうちに立派な僧都は入つて參られました。大師これを見て、

「將來我が師と頼む大徳か」と恭しく迎へれば、叔父は僧都に大師を紹介されました。僧都つくづく大師を見て「まこと此の和子は大佛器である」と歎賞されましたので、叔父上も思はず大師の志を物語られました。大師はひそかに期節到來を喜ばれたのであります。

かくて大師大學に入つて、味酒淨成博士に毛詩左傳尚書を、岡田博士に左氏春秋等の學科を授けられ傍ら勤操大徳の教も受けました。大徳から虚空藏菩薩求聞持の法を授かつたのは、未だ大學に入らない時でありました。間もなく大學は長岡に移

りましたが、大師は時々大徳の許に參つて其の教を聞きました。此の頃の苦學の有様は大師自から「二九にして槐市に遊聽す。雪螢も猶怠るに拉き、繩錘の動らざるに怒る」と、申されてあります。一寸難かしいお言葉であります。之れは昔支那に孫康といふ人がありまして、家貧しく油を買ふことが出来なかつたから雪の夜に雪の光りで本を讀みました。又車胤といふ人は螢を澤山袋に入れて、其の光りで勉強しました。孫敬といふ人は梁から繩を下げ、これに首を懸けて睡氣を催すと縊れるやうにしました。蘇秦はまた錐を股に立て、睡氣を防いだといふことであります。大師はこれ等の人々の幾倍勉強するといふ意味であります。大師のやうに生來發明な御方でさへ尙斯様に勉強せられたのを思へば、吾々凡夫殊に青年學生は、益々勇猛心を振作して、學びの道にいそしまなくてはなりません。

と、心の謝

大師大學に入つて未だ日は浅いが、人一倍の苦學を致された爲めに、其の學識は長年在學した年長のものも遠く及ばなかつたのであります。而して傍ら佛教をも修められましたから、智識の進むに従つて心を人生の諸問題に寄すること益々深くなつて來ました。それと同時に從來修め來た儒道の教理が餘りに淺薄なのを覺つたのであります。けれども唯り佛教はそうではなかつた。前の二ツが單に現在のことのみ説くに過ぎないのに、佛教は過去、現在、未來までも教へを説き、其の教旨の深遠にして廣大なること、儒道などの及ぶ所では無い。加之佛縁淺からぬ大師は、寧ろ此の際佛門に入つて専らこれが研究に従はうと決心し、この事を叔父上に相談されたのであります。

所が叔父上は大師の學才が、研けば研くほど光を添へるのを見、益々遁世させるのが惜しくなつて、色々に大師を説き諭して、其の志を翻させやうと努められました。又都に在つた親族や學友なども、言葉を盡して引止めましたけれども、大師

の決心は既に磐石のやうでありました。そこで叔父上は「若し佛門に入れば忠孝の道に背く」とまで極言したので道の大師もこれには確と當惑されたのであります。當時佛教は中々に盛んでありましたが、又其の反動で僧侶等の墮落も甚だしかつたのであります。されば桓武天皇は屢々勅して之れを誠諭め給ふた程であります。叔父上の申されたのも畢竟これ等を指したのでありますから、大師は更に此の問題を解決する爲めに、深く佛教の奥義を探つて、遂に一大鐵案を得たのであります。それは「佛教は管に儒、道兩教以上に高尚で尊嚴ばかりでなく、眞の忠孝は佛教研究の上でなければ、完全といふことは出来ぬと申すのであります。そこで聳鼓指歸といふ立派な本を書いてこれを叔父の家に残し、一切の榮譽を振り棄て、衆生濟度の爲に盡さんと、花の都を後にして勤操大徳の許に奔つたのであります。そして具に事情を打明けて大徳の近士となり、名を無空に改めたのであります。嗚呼年頃日頃望まれた出家の願、漸くこゝに達せられやうとする大師の喜びは如何ばかりでありましたらう。

ち、御難行

近士はまだ本僧でありませぬ。されば大師は得度の式を受けるに先つて、衆生の爲め難行苦行せんものと發願せられました。そこで師、大徳の許しを受けて、延暦十一年の春もまだ稚い二月の空に、其の首途に上られたのであります。時に御年十九でありました。先づ大和國大峰山金が峯へと志されました。此の山は名高の役の行者小角の頂上を極めることが出来なかつたといふに、風は肌を裂き、満山の雪は針を植えたやうに氷つてゐる中を、大師は藤衣唯だ一枚といふお姿で、只管頂上へと辿られました。道は歩一步困難になり、幾度か危険に遭逢されましたけれども口に呪文を唱へながら毫も心に止めず登り登つて遂に頂に達しました。見渡せば白雪の外には目に入るものとは無い。大師は雪に埋もれた岩上に座禪して、專念法

を修めること實に三十五日でありました。

かくて大に悟る所あり、此の山を下つて、吉野の山を過ぎ、紀州の山に分け入られました。そして花の臺のやうに登えてゐる、高野の勝地も探り、それから海を越えて四國に渡り、阿波國那賀郡大瀧嶽に登らうとせられたのであります。大瀧嶽は太古のまゝの峻嶒な深山で、樹木は生茂つて晝尙ほ闇く、名も知れぬ鳥獸が怪しい聲で鳴き叫んでゐる。まだ一人も登つた者が無い山なので、大師の登山せられるといふことを聞いた土地の人々は、皆生き還ることは出来まいと語り合つたのであります。

時しも夏の最中、生ひ茂つた草木を分けて小徑を拓き、茨、毒蟲に蝥されたことは數限りも無く、その上穀味を斷つて登られましたので、困難の度は一步一步加はるばかり、されど大師は少しもひるむ氣色なく、遂に頂上に達したのであります。四邊を見廻せば不思議な形をした四つの窟がありました。大師は其の附近で日夜求

聞持の法を修められたのであります。或る月の明らかな晩でありました。大師は自ら満足することの出来ぬところあつて御佛に一身を托して岩窟の中に身を躍らしたのであります。不思議や何事もなかつたのであります。折柄大空より光りの寶劍飛び來ると見しとき、自ら菩薩の威儀を得たのであります。

それから土佐國安藝郡室戸の崎に參られました。此所は亦峻嶒なので有名な修行所であります。大師は此所に庵を結んで一心不亂に修行されました。丁度満願の曉の事、明星飛び來て大師の口に入つたと思ふと、忽ち胸中清々として大千世界を照見るの感があつたので大に喜ばれました。毒龍などが出現れて大師の行法を妨げたのも此の時であります。

二、二年に亘る

かくて室戸の崎を發つて四國を經廻り、ふたゝび海を渡つて山陽道に出で、嚴島

に參詣して彌山の頂に暫く修法せられました。下山の時小堂に供へてあつた柏木をば、何心なく側の大地に突差したのが、遂に根つきて幹子となり枝葉繁茂るに至つたといふことであります。

安藝國から吉備播磨と進まれましたが、或は野出に寝ね。或は樹下石上に夜を明し、或は食を路傍に乞ひ、或は斷食するなど、具に難行苦行をして播磨國へ入つたのは、寒風骨を刺すやうになつた頃であります。一晚農家に宿を頼むと、老婆出て快く迎へ、見事な鐵鉢に御飯を盛つて夕餉を薦めました。大師不審に思つてこの鐵鉢の因縁を尋ねますと、老婆申し遅れたる様子で語るやう「これは行基菩薩の弟子行然法師が師行基菩薩より賜りしもの、私は行然が出家以前の妻にて、十年前行然入寂の時、私を招き、此の鐵鉢は昔婆羅門僧正が天竺より持ち歸りしを師行基菩薩に傳へ、夫れを又自分に授けられしもので貴重な品である。吾が死後十年目の霜月も末の頃、一人の菩薩が訪れて來やう。その時これをその菩薩に御傳へ申せ、と

呉れくも申しましたが、丁度その時も參り實は御僧の御出でを待つてゐた所であります」とて、いと親切にもてなすのであります。大師も事の不思議に驚き、一層心を勵まされたのであります。翌日此所を出立の時、報恩として同家の柱へ「天地合」の三文字を書いて、鐵鉢を貰ひ受け、道を東へと向はれました。此の鐵鉢今は國寶となつて高野山の御影堂に藏められてあります。又柱の文字は何程削つても消えず、これに水をかけてその水を服用めば、如何なる病も立ち所に平癒つたと申し傳へて居ります。

此の時大師は近畿地方を普く遍歴して、更に東海道を伊豆の邊りまで參られたとも傳へます。斯くして足掛け二年に渡る大難行の末、奈良岩淵寺に歸られたのであります。師勤操大徳は大師の姿を見るや涙を流して打喜ばれました。實に此の間の大師の御修行は、非常なものでありますから、肉は落ち、眼は凹み、皮膚は赤銅のやうに光り、衣はあらめのやうにうち破れてしまひました。其の變りはてた御姿

は大師が苦行の跡を物語つてゐたのであります。而して大師の御心は玉のやうに清く、御身は金鐵のやうに鍊り鍛へられました。大徳は大師の御手を把らんばかりにして、その苦をいたはり、その勞を慰められました。

ぬ、得 度 式

勤操僧都は大師の御修行を認めて、早速大師を伴ひ、和泉國和泉郡横尾山へ登られました。此の寺は二十九代欽明天皇の御願に依つて行基菩薩の開かれた有名な梵刹で、境内まことに静かな所であります。大師は此所で緑の黒髪を剃落し、沙彌の十戒、七十二の威儀を授けられたのであります。そして名を教海とお改めになりました。時に延暦十二年大師御年二十歳でありました。得度式もめでたく終り、師の許で親しく三論宗の教を受け、傍ら他宗の教義も研究になり、尙ほ暇あれば諸寺諸山に經典を採ねて研究を重ねられたのであります。間もなく名を改めて如空と申さ

れました。延暦十四年大師二十二歳の時勤操師の盡力で、奈良東大寺の戒壇に登ることになりました。元興寺泰信律師を初め、東大寺安暨、安禎、貞良、樂上律師、西大寺勝傳、平福律師、興福寺の信命、靈忠律師、招提寺の安琳、豊安律師など當時有名の大徳方を、それ／＼役師に奉請して、大師自ら戒牒文といふを作つてこれを奉り、嚴かな法式の裡に大師は是足戒を授けられました。こゝに大師は立派な一和尚となられました。御名を空海と申されたのも此の時からであります。

る、解 け ぬ 疑

大師は經典を研究すればする程、疑惑の雲叢り起つて、非常に煩悶せられたのであります。研究を積み積む程、教義明かになる筈であるのに、却つて次第に疑ひを生じたと申せば、如何にも不合理な様であります。勿論大師は既に經法の研究は盡してゐられました。けれども大師の非常な熱心は、またそれでは満足せられな

いで「もつと高尚な教があるであらう。吾れに満足を與へる不二の法門があるに相違ない」と、日夜心を碎いて尋ねたけれども、一向に見當りません。一旦は失望されまされたが心を勵まし、此の上は御佛に祈請して御告を得んと、東大寺大佛の御前に端座し、焼香讀經して「吾れ佛法に従つて常に至要を求め尋ねるに三乘五乘十二部經も心神に疑ありて未だ以て決を爲さず。唯だ希くは三世十方の諸佛、何卒吾れに不二の經を授け給へ」と一心不亂に祈願されました。されど、何事もありませぬその中に一日満願の日となりました。今日こそは如何にもして御告を得んもの心と心を勵まして祈請を置められたが、長い間寢食を忘れての心願とて、流石の大師も疲勞の爲めか、睡るともなく暫時うとくとされました。時に夢の中に雲が湧き起り一人の聖人現はれて宜ふに「此所に經あり、名を大毘盧遮那經と申す。之れ汝が尋ねる不二の妙經なり」と御告がございました。大師打喜んで眼を開けば、既にその人は無く、大佛の御像一入輝いて見えました。大師は幾度か禮拜して御禮を申さ

れました。しかし經名は分つたけれども、此の妙經が何方に在るかは、一向に見當が附きませぬ。諸大德に質しても、一樣に知らぬと答へるばかりで、大師は再び途方に暮れました。けれども御佛の御告げであるから、必ず何方かにあるに相違ないと、更に心をふるひ起して、經典を尋ねる爲め大に苦心をさるゝこととなつたのであります。

此の時分、前に書いた「雙鼓指歸」を訂正し、題を「三教指歸」と改めて世に公にせられますと、人々争つて寫讀み、皆その高説に驚かぬはなかつたのであります。これから大師の名は一層喧傳されたのであります。翌年桓武天皇の御願で、阿波國司藤原朝臣文山卿に勅が下り、同國大瀧嶽に伽藍を建立することになりました。この時大師も阿波に渡つて心添へをされました。此所は大師が第二捨身の舊蹟でありませぬ。大師此の地に滞在の中に諸佛の像を彫刻して、此所に安置されましたが何れも丸で生きてゐるやうでありました。寺はめでたく出來上りました。これが舍身山

大龍寺であります。

を、父母の許

大師草庵からの歸途に、久し振りで故郷に立ち寄られました。大師は出迎の人々に丁寧に一々會釋しつゝ邸に入り、待受けられた御両親を初め、親族一同と對面して互に無事を喜び合はれました。殊に吾子の聖人姿を御覽になつた御両親の喜びは譬へる物がありませんでした。姉公御夫婦も總領智泉を伴れて參られました。久方振りの挨拶も濟んで楽しく語り合ふ中に話は智泉の上に移つて、此兒も生來佛縁深く、二歳の時自ら智泉と名乗つて、両親を驚かしそれから、両親も智泉と呼ぶといふことを聞いて、大師も熟々感心せられました。又母から早く叔父上の御弟子となりたいと日頃口ぐせの様に申して居ると聞いて、「夫れならば是非自分に托されよ。必ず立派な僧都に致たさうから」と申されました。姉公夫婦も夫れを聞いて大に喜

び、將來のことなど吳々と頼みました。此の時智泉漸く十歳でありましたから「十三歳ともならばこの叔父を訪ねてまゐるやう、先づそれまでは學業を勵まれよ。」と智泉の頭を撫でながら仰せられました。智泉はこれを聞いてさも嬉しげに點頭かれました。幾程もなく大師は故郷を後に奈良へ歸つて、師勤操大徳に大龍寺落成の事を報告されました。

わ、經を尋ぬ

次いで又聖經を尋ねて各地に遍歴し、如何に避地でも寺といふ寺は必ず訪れ、如何に峻岨でも靈場といふ靈場は詣らぬ所は無く、まことに東奔西走、席の暖まる暇とてもなかつたのであります。當時は今日と異り、道などもまだ充分開けて居りませんでした。其の爲め、遍歴なさる時は道なき所は道を拓き橋なき所は橋を架けて

公益を計られました。
或る時は金剛山に登り、或る時は伊勢大廟に參拜して古書を調べ、時に朝熊嶽に求聞持の法を修められ、遠く石見の峯々出雲の山々に攀ち登り、具さに難行苦行を續けられました。

先に甥智泉との約束もありましたので、一度奈良に歸れば、果せるかな智泉は父と共に訪ね来て、遂に大師の弟子となつたのであります。時正に延暦二十年、智泉十三、大師二十八歳でありました。大師良弟子を得て大いに喜び、いと親切に教へ導かれたのでありますが、大師自らが尙御修業中でありましたから、師勸操大徳に智泉を托んで又もやも経探がしの旅路に就かれたのであります。かゝる中に一二年は夢と過ぎました。されどまだお經の在所は分りません。一日も早く尋ね出して、疑ひを晴らしたいと、和泉の山川を經めぐつて、或日宇陀郡室生山に至り庫裡を訪づれました。すると若い一僧が出て懇ろに迎へましたので、其の志を打明けると

大いに同情して心當りの名刺を教へて呉れました。けれども其等は既に大師が訪られた所ばかりなので、最後に「大和國高市郡久米寺の東塔は如何に」と教へられました。久米寺も一度は訪ねた所でありましたが、その東塔は檢べなかつたのでありますから、大に力を得、厚く禮を述べて、直ちにその足で久米寺へと向はれました。此の時伴の若僧は大師は凡僧でないと思つて「後日吾を貴僧の門に許されよ」と申されたので、大師も快くそれをお許しになつたのであります。久米寺は靜かな雅い所で、後年大師支那から歸つて此所に寶塔を建てられました。その五重塔は形の珍しいばかりでなく、立派なる事日本第一と稱があります。大師は斯様に建築學上にもその範を示されたのであります。

か、大 日 經

やがて久米寺に至つて、東塔内に入り残る隅なく尋ねたけれども、更にそれらし

いものもありませぬ。そこで大師は最後の祈願として「この聖經を得るまでは斷じてこの座を起たじ」と日夜この内佛に向つて熱誠を捧げたのであります。尊き御命を捨て、までも衆生を救はんとなされし心願を、諸佛も感應ましましたのでありませう、それから幾日か經つたある深夜、何處からともなく清々しき御聲「汝が尋ねる大日經は、當塔大柱の下にあり、疾く求めよ」との有難きお告げがございしました。大師は夢かとはかり打喜び、幾度か佛恩を謝し、直ちに塔の下に行つて、少時くあたりを探ねるうち、まばゆきばかりに光り輝くものがありました。大師は天を拜み地を拜み、走り寄つて之を調べて見ますと、果して其中から大日經一部七卷が現はれたのであります。

抑も大日經は、天竺の善無畏三藏といふ方が、支那から渡り來て暫く此所に留り新法を弘めんとされましたが、未だその頃、この新教に耳を傾けるものがありませんでした。三藏は此所に修行すること三ヶ年、此の經を當塔大柱の下に埋め、一將來

弘法利生の菩薩來りて此の經を世に弘む可し、其の機を待たん」とて、この事を記して遂に歸國されたのであります。それから幾十年の春秋が過ぎましたけれども一人の求法者もなかつたのであります。茲に初めて大師が訪れたのであります。大師こそ正しくその菩薩であつたのであります。時に大師は年三十、お經を尋ねにかゝつてから正に十年の長の年月を難行苦行せられたのであります。そして其の利益は、皆是れ吾々衆生が享けたのであります。何と有難く勿體ないことではありませんか。

大師お經を携へて奈良に歸り、自房に籠つて一心不亂に此の經を繙いたのであります。但し、非常に難解くて流石の大師も其の意味がよく解らなかつたのであります。勿論最早日本には、これを問ひ尋ねる人もありません。けれども半解で措くことは大師の忍び得る所ではありません。そこで唐に渡つて研究して來やうといふ志を起されたのであります。この時丁度遣唐使が出發するといふ噂がありましたので、

これ幸と渡唐のことを師の勤操大徳に願はれたのであります。師も大師の熱心に動かされて、早速この事を上奏して下さつたのであります。

よ、大 唐へ

五月十二日、大師は勤操大徳と共に参内して、勅を拜受しました。延暦二十三年六月初めに難波を出發されました。時の遣唐大使は藤原朝臣賀能卿で、同副使が石河道益卿、判官菅原清公、録事朝野鹿取と申す人々、これに随つて留學したのは、大師と天臺開祖最澄法師と橘逸成卿とで、最澄師は四十歳、大師は三十一歳でありました。出發する時智泉は、隨行を願ひましたが、大師はお許しになりませんでした。

船は動き出しました、多くの人は別れを惜んで、其の影の見えずなるまで見送つて居りました。一葉の木船で、萬里の波を颯つて行くのでありますから當時唐へ渡るといふことは眞に命掛けのことでありました。されば孝心深き大師は嚙む母上が心配なさるであらうと、自ら姿を描いて母上にお贈りになりました。これは九州御滞在中のことにも申しますし又途中故郷へ御立寄りになつた際のことにも申します。今も善通寺に御影ヶ池といふがあり、大師が御自分のお像を描く爲め其のお姿を水にうつされた池であるといひ傳へてあります。その御影は今尚善通寺の重寶となつてをります。

船は景色の好い瀬戸内海を通つて六月中頃、豊前の津に着きました。それより肥前國松浦郡に廻つて艤ひする定例で、此の間暫らく暇がありますので、一行は吉例に依り、宇佐八幡に参詣して、海路の安全を祈りました。時に大師は自筆の般若心經一百卷を奉納せられ又此の暇に薬師如来の尊像を刻み、船の守護佛とされました。今仁和寺にあつて人々の崇敬致すのが即ちそれでありました。船の艤ひも出来て七月六日纜を解きました。第一船には賀能卿と大師と逸成卿、第二船には副使、第

三船には判官及最澄師、第四船には録事といふ順でいよく大唐へ向はれました。海上は平穩で、船の中は笑聲に満ちました。此時最澄師は弟子通譯など連れて行かれましたが、大師は何人もお連れになりませんでしたといふのは大師は語學にもよく通じてゐて、通譯などの必要がなかつたからで、これに依つても大師平生の御精力の程は實に驚くの外はありません。

た、途 中 の 難

山影一つ見えぬ青海原で、幾日かを明かし、流石に一同も心細さを感じる折柄、或日、突如に一天かき曇り、雷は鳴り、電は閃めき、盆を覆す大雨となり、風さへ吹き出して山のやうな大波は今にも船を吞まうとする。船は木の葉の様に舞ふこと一晝夜、人々何れも弱り果て生氣あるものは一人もない有様であるのに、大師のみは舷に坐つて一心にお祈りをなさるのでありました。日本一百八十七ヶ所の天神地

祇に向つて、般若經を書寫し、一部宛奉るといふことを誓はれた。すると、さしもの雨風も跡形なく鎮まつて、再び晴朗な天候となりましたので、人々は非常に喜び神徳を謝し、又大師の行法を稱へました。大師も神の加護を喜ばれましたが、悲しいことには他の船の行方が不明となりました。船具は破損又は流失して、やつと航海をつゞけること三十四日八月十日になつて漸く陸の影を認めましたので、人々は聲を出して打喜びました。船は岸に着けると、其所は福州の海口でありました。日本からは蘇州若くば揚州に行くのが一番平易で、此の道程三千里、從來それを行くのが例になつてゐたのを暴風の爲めに福州へ着きましたので、七百里五日の損でありました。着陸早々土地の役所へ届け出ますと、州長が今病氣で居らぬ爲め、吾々には何とも取計ひ兼ねるから直様衡州へ廻航せよ。陸を行つてはならぬと云はれて止むなく又船は衡州に向ひました。漸く到着して上陸の許可を乞ふと此所でも又許しませぬ。強ひて請へば國書を見せよと云ふ。所が國書は本船にはなかつた爲め、

一層怪まれて五十餘日を空しく過ごしました。すると閻濟美といふ人が、新に州長となつたと聞いて、大いに喜び早速上書しましたけれども何の返事も無い。再三窮状を訴へ、大任を帯てゐることを告ましたけれども更に効がなく、果は武装の役人が来て、船は封鎖し一行を沙上に据ゑましたので、血氣にはやる船頭等は抵抗しやうとしました。それを大師等は慰めすかしてやつと事無きを得ました。賀能大使は大師が名筆で文章が上手なことを知つてゐましたから、州長に奉る書面の代作を頼みました。大師も快く御承知になり、誠心こめて筆を執り忽ち一文をお作りになりました。大使は喜び早速これを州長に呈出すると、さしもの州長も、大師の名文には心を動かされたと見えて、間もなく使ひが来て封鎖を解き一行を船に歸らせました。そして曰ふには「願文の趣き即時に長安の都に奏聞したから沙汰を待たれよ。暫くは不自由にて忍び給へ。また不足の品あらば給與ん」とのことでありました。後三十九日經つて京から御沙汰があり。州府の小吏四人を下され食料品等を給與

られました。州長閻濟美も自から一行を慰問し、早速十三軒の假家を設けて一行を迎入れました。一行はこゝに漸く蘇生の思ひをしたのであります。

京入り

次いで朝廷から慰問の勅使が参りましたので一行は涙を流して喜び迎へたのであります。愈々一兩日中に出發することになつたので、一同勇んで準備をしました所。またもや大師にとりて迷惑な事が起りました。といふのは州長が大師の智識を愛し己れの學友にして永く止めて置きたいといふ噂が傳つたからであります。大師は之れを聞いて大いに驚き、直ちに熱誠こめし書狀を送りました所、州長も大師の心情を察して快く承知しましたので、愈々十月三日一回打揃つて此の地を後にして、七千五百二十里の旅程に上つたのであります。道中何事もなく十二月二十一日に京近くの長樂に着きました。朝廷からは迎客使が二十三頭の馬を曳いて一行をこゝに出

迎へ、酒肴を出して長途の疲れを慰めました。これから迎客使の先導で、十二月二十三日長安の都に入つたのでありますが、大使には七珍の鞍、其他には粧り鞍を贈られたので行列の立派さは見物人が路に充滿したといふほどでありました。宮城内の宣揚坊の官舎に入ると、他船の人々が一行の到着を待つて居ました。他船は九月一日明州に漂着して、十一月十五日入京したのでありました。そこで互に手を執り合つて無事の再會を祝ひました。最澄師は直ぐに天臺山に登つたので入京しませんでした。二十五日國書國産を徳宗皇帝に献上しますと、優渥も言葉を下されたので翌日大使以下の官人は宣化殿に登つて御禮を申上げ、麟徳殿にて拜謁を許され饗應を受けました。あくれば延暦二十四年、唐の貞元二十一年正月二日から遽かに徳宗皇帝御不例となつて次第に重るばかり、遂に月の二十三日崩御になりました。御年六十四。二十八日になつて順宗皇帝が即位せられ、賀能大使の一行は翌二月歸國されました。

その、惠果和尚

大師と逸成卿は百命で、西明寺の永忠和尚が先に居た所に住みました。永忠は京都の人で、寶龜初年入唐して佛法修行に努め、代宗皇帝の優遇を受けた名僧であります。これより大師は諸所に名僧大徳を訪ねて吾が師を求められました。當時大唐は密教の盛んな時代で、殊に長安はその中心でありましたから、名僧が多く住まつて居りました。中にも青龍寺惠果和尚は密教第一の大徳で、大興善寺大智識不空三藏の高弟でありました。眞言大祖より七代の嫡嗣で、徳望一世に高く、代宗徳宗順宗三代の歸依を受け、灌頂の大師と仰かれ、密教の長者佛敎界の泰斗でありました。幸ひ大師が居た西明寺の住持談勝法師と和尚とは、懇意の間柄でありましたから、大師は法師に自分の志を語つて和尚に紹介をお頼みになりました。法師は快諾して早速學僧數名を引連れ、青龍寺に參つて和尚に大師を紹介されました。大

師は和尚の前に進んで恭しく禮拜されますと、和尚は大師の姿を見て莞爾と微笑み「吾れ汝を待つこと久し」と申されましたので、流石の大師も驚かれたのであります。和尚は大師の凡僧ならぬを見て、よき傳法の資を得たりと早速兩界秘密灌頂を授けるから、その仕度をせよと申されましたので、大師は天にも昇る心地で引さがり、これより入壇灌頂の準備を急がれました。

つ、大阿闍梨

六月十三日、いよく準備もとのひ、青龍寺に至つて灌頂壇に上られました。最初金剛界大曼荼羅に臨み、惠果和尚の命に依つて抛華されました。これは虚心で曼荼羅に向ひ、合掌して華を投げるので、その華の中り所で其の人の位が定まるのであります。眼を白絹にて覆ひ、合掌して紅華を抛げれば、丁度真ん中の大日如來の尊像に當つたのであります。まことに珍らしいことなので、和尚は益々大師の凡徒

で無いことを覺られました。乃で大師を最上の果位に置いて瓶水で灌頂されました。七月上旬、胎藏界大曼荼羅に臨みました。前と同様の法式で抛華すると又もや大日如來の尊像に中つたので、一同の驚異と大和尚の喜びは一方でありませんでした。そこで遍照金剛の法號を授けられたのであります。次いで最後の名譽たる傳法阿闍梨位の灌頂を受くることとなりました。すると或る日のこと一人の僧が大和尚の御前に出で「私は内供奉十禪師順曉阿闍梨の弟子玉堂寺珍賀でありますが、大和尚に申上げたきことがあります。外でもありません。貴下は日本の學問僧空海と云ふ者に、三密秘教をお授けになるとの噂がありまするが、事實で御座いますか」と申しました。すると和尚は唯一言「眞實ぢや」とお答へになりました。件の僧は膝を進めて「そはまた意外のこと、吾々は大不服であります。速かに門外へ彼の空海を追ひ拂ひたまへ」と平服して言上したけれども、和尚は何ともお答へになりません。珍賀もどかしく「和尚の門下生は非常に澤山ありますが、兩部を授けられた者は殆

んどありませぬ。それを何で他國の一小僧に此の大法をお授けなさりますか、其の心を得ませぬ。徳を傷けるものではありませぬか、何卒御考へ直して下さい』と再三申入れましたけれども、更にお答へがないので珍賀も今はとりつく島もなく、すごく歸つて行きました。然し心の中は残念でたまらず、その夜道ならぬ妨法の祈願を立て、一心不乱に祈つて居りましたが疲れて少時まどろみますと、異形の佛人夢中に現はれて散々嚴戒を下されたのであります。珍賀大いに驚いて眼を覺ました夜の明るるを待つて急いで大師の許に馳せつけ、懺悔して只管その罪を詫びました。八月初めの吉日にいよく傳法大阿闍梨位の灌頂を受けました。大和尚は五智の瓶水を大師の頭上に灌ぎ、目出度法式を了つて、茲に大師は大阿闍梨となられたのであります。かくて不二門、悉く傳へられたのであります。丁度一器の水を一器に移したと同様で些しも洩らす所とはなかつたのであります。式場の壯嚴さはさながら現世の極樂でありました。此の日五百の僧に齊を供養し、高僧大徳、悉く來集

して皆大師の徳を賞揚へたのであります。此の事忽ち大唐の上下に廣まつて、大師の名は彼地でも喧傳されました。本門は丁度大師に至つて八代相承の大法で、其の正統は遂に大師に依つて日本に移されたのであります。

ね、師と訣る

惠果和尚は大師を見を誠に親切で、親子の情よりも深かつたのであります。和尚は眞言の大法を悉く大師に傳へましたが、眞言密教は隱密であるから、圖書を假らないではよく傳へがたいとて、そこで供奉の畫工李眞等に申附けて、金剛胎藏兩界大曼荼羅傳法阿闍梨の御影十舖を描かせ、寫經生二十餘人に金剛頂經など一百餘部の藏經を寫させ、尙供奉の鑄博士揚忠信趙吳等に道具十五具を作らせ、總べてこれを大師に渡されました。この經文や影像や道具の大部分は今も尙ほ國寶として高野山御影堂其の他に保存されてあります。かくて和尚は『一日も早く日本に歸つて天

下に傳法せよ』と仰せられました。大師は師恩の厚きに感じ、御自分の袈裟と手香爐とを『青龍寺和尚に衲の袈裟を献するの狀』と認めたる書面と共に和尚に献上して聊か報恩のしるしとされました。とかくしてゐるうち十二月の中旬となりました。或日和尚は遽かに大師並に弟子等を招いて遺言されましたので、一同大いに驚き悲しんで頭を上げ得るものもなく、泣き悲しむ聲は堂に満ちました。和尚は蘭湯に入り新衣と改めて、右を下にし、北に枕をし、大毘盧遮那如来の印を結んで、月の光も氷る曉方、遂に入寂されました。稀年六十、弟子一同の悲しみはいふまでもありません、殊に大師の悲みは形容もない程でありました。其夜は恩師示寂の前に大師獨り侍つて居りますと、和尚はふと眼を開き莞爾として大師との深き宿縁を物語られ『世々互に師となり、弟子となつて相扶け永く佛法を弘めやう』と申されましたので、大師も夢かと驚きました。やがて誓ひ申上げますと又元のやうに眠られたといふことであります。和尚と大師との因縁、如何に深かつたかと分ります。

翌年の正月十六日、和尚の亡骸を城東に葬りました。

會葬した僧侶四千餘人、四衆の來會は數知れず。さしもの葬場も満員の有様でありました。大師この日多くの人に推されて和尚の碑文を撰びました。當時大唐は文學が盛んで、殊に長安は文章の大家が澤山に居たのでありますが、その中から大師を撰ばれたといふのは、大師が非常に文筆に秀れて居られたからであります。大師も今は辭退もならず、こゝに一大長文を作られました。師を思ふ眞心をこめましたことゝて、長安人士も其の名文に驚かぬはなかつたのであります。

な、五筆の稱

次いで大師は諸方の名僧大徳を訪問して教を受けられました。醴泉寺では般若三藏にお會ひになりました。三藏は天竺の人であります。この頃唐に來て經文の翻譯をしてゐた偉い僧であります。久しき以前から日本に行きたいと希望されてゐたの

でありました。機会が無かつたのであります。されば大師の訪問を受けて大いに喜ばれ、『今汝に會ふを幸ひ、吾の譯せし新華嚴經、六波羅密經及び梵夾を附屬するから、持歸りて吾が志を通ぜよ』と申されました。同國牟尼室利三藏にも邂逅ひ曇貞和尚に就て悉曇を學び、更に書面を越州の節度使に贈つて、廣く内外の經典を求められました。又傍ら讚、經論、章疏、圖畫の膽寫に心力を注がれたのであります。猶大師は凡ゆる支那の文明を我國に傳へやうとの思召から、繪畫、彫刻、詩文書法、音韻の學問より、造筆製墨等の末技まで皆研究なされたのであります。夫れも衣鉢窮乏の中にあつてとあります。或日大師一室に籠つて暫らく定中に入られますと、神童が現はれて吾れ上人を案内せんとて靈山に導かれました。大師やがて靈山に到り、釋尊に面會して、色々有難い御言葉を受けて、再び先の神童に見送られてお歸りになつたといふことであります。

此の頃宮城の壁に書いてあつた王羲之の筆蹟が破損しましたので、その修繕に着

手しました。けれどもそれを補修する程の能書家は、廣い支那にもなかつたので、皇帝は大師に其の命を下されたのであります。大師初めは御辭退申しましたけれども遂にお受けになりました。當日になれば皇帝陛下を初め百官星の如に居並んでをりもます。大師は實に日本の名譽を双肩に擔つて居ることゝて責任は軽くありません。神を凝らして筆を揮へば文字さながら生けるやうに書けました。人々は歎賞の聲を揚げ皇帝も御感斜めならず『書法の精妙なる一々執筆の五法にかなへり』とて五筆和尚の名を賜つたのであります。大師ある日、獨り城内の河縁をそとろ歩きして居ますると一人の見すぼらしい小童が現れて『貴僧が五筆和尚でありますか』と尋ねたので、大師いかにもと答へになると『それでは此の水面に文字を書いて御覽なさい』と申しました。大師云はれるまゝに一筆試みられますと、見事に水中に文字が現れましたから童子は賞讃へながら、自分も書いて見ようと、水に書きますと、これも文字が美しく現れました。大師もこれは凡童でないと驚かれましたが、童子

の書いた龍といふ字に、一點足りない所がありましたから、之をお質しになりました。すると童子は莞爾としてこれを補ひますと、忽ち眞の龍となつて昇天し、童子の姿も共に消えてしまつたのであります。之は文殊菩薩が形を變へて大師の名筆を試みられたのであつたといふことであります。

ら、寶を乗せて

大師が唐に渡られる時には、二十年も留學する決心でありましたが、生れつきの聰明と絶倫の精力とは、僅かに一二年で研究し盡されたのであります。この上留るも詮なきこと、又一つには恩師との約束もあることゝして、いよく歸國を思ひ立たれたのであります。折しも日本より第二の遣唐使高階真人遠成卿の一行が參つたといふ報を聞いて、大に喜び早速逸成卿にこの事を相談になりますと、これも直に贊成して大師にその手續を頼まれたのであります。そこで遣唐使に依頼して歸國を請ひ

更に唐朝に上申されました。皇帝は大師に深く歸依して居られましたから、非常に歸國を惜まれて、大師を召し、尙ほ暫く留唐を望まれました。けれども、大師は具さに志のある所を上奏して、遂に勅許を得ました。そして皇帝から饒別として菩提樹の珠數を賜り「來世を期す」との有難いお言葉を頂きました。かくて一行は朝廷に暇乞して長安の都を去り、明州の海岸から乗船して日本に向ひました。時に八月の中旬でありました。大師乗船に先だち日本に向つて三鈷を投げ「密教の弘布に相應の聖地あらば知らしめ給へ」とお祈りになりました。後日この三鈷高野山の松ヶ枝にかゝつて、開山の手引となつたと申します。海は静かで青壘を行くやうでありました。大師は恩師の命で彫刻した不動明王の尊像を、船中に安座して、之を守護佛とされ、日夜之れに祈願されました。兎角するうち又もや暴風雨に遭遇、人々生ける心地もありませんでした。が大師は唯獨り平日と變らず、佛前に額づいて一心に鎮靜を祈り「若し靈驗を賜はらば、歸朝の後一寺を建立して報謝せん」とお誓ひ

になりました。すると不思議や不動明王の御手が頻りに動いて、御剣で波を左右に切られるのを拜しました。間もなく風波収り元の様になりましたので、一同胸撫で下して安堵しました。「波切不動」の縁起は即ちこれでありました。これより海上平穩時に誰れとも知れず「日本の天皇崩御」といふ聲がありました。人々さびかひながら航海を續けてゐる中、十月二十三日懐かしき故國の影を望み、一同大に喜びました。殊に大師は一學問僧で國を立たれたのでありましたが、今は大阿闍梨となつて山なす寶を乗せて歸られたのであります。大師の心中はいかばかりでありましたらう。程なく船は筑前博多の津に着きました。

む、最初の密寺

此の報太宰府に傳はりますと、少貳田中八月鷹卿出迎へて、三月十七日に先帝崩御あらせられ桓武天皇と諡し、五月十八日皇太子安殿親王御位を繼がせ給ひ、大同

元年と改元したと聞き、一同船中の聲を思ひ合せて驚かぬはありませんでした。大師深く悲しんで喪服を着け、請來の經典佛具の目錄を造り遣唐使に托して新帝に奉りました。之れ有名なる請來の御文であります。大師は此處から一行と別れ、一人當地に滞在したのであります。時に太宰府から通知があつて「此の地觀音寺に假住して勅命を待たれよ」とありました。此の寺は日本三戒壇の一で、九州第一の巨利境内に四十九院あります。大師此所に寶物を納め暫く九州各地を遍歴されました。大師は歸の時の誓ひを果し、且つは密教が傳來した最初の聖地を記念し、又嘗て善無畏三藏が假住の地と聞いて此の地に一寺を建立したい希望でございました。一日太宰少貳田中八月鷹卿が訪ね来て「去年母が死去つてから早や年忌となりました。何卒冥福を祈らせ給へ」と願ふのであります。八月鷹卿は早くから大師に歸依して居た人、大師もその孝心に感じて此の願を快よく容れ、二月十一日が其の命日と聞き、それまでに佛像十三尊經文十軸を寫し、別に忌齋の願文一首を認めまし

た。愈々忌日が來ました。八月鷹卿は一家親族打ちそろつて參拜し、壯嚴なる法式を執行されたのであります。式後に大師は八月鷹卿に一寺建立の願ひを語ると、同卿も大いに賛成し及ばずながら盡力いたさんと申されました。大師もこれに力を得八月鷹卿の助力に依り勸進されました所、金銭や材木が續々として集りました。次いで寺院の造營に着手して、大師自ら工事を監督し、傍ら請來の寶具を整理されました。かくて日本最初の密寺は目出度落成したのであります。寺號を東長密寺と附け大師はこゝに移り住まはれました。そして相變らず寫具を整理し、傍ら少しづつ眞言の説法をなさいました。遠近より來り聴く道俗甚だ多かつたのであります。兎角する間に一年過ぎて、都からは經具隨身入京せよとの宣旨がございました。

う、みことのり

そこで東長密寺を八月鷹卿に托し、大師は經具を携へ便船で出發されました。途

中恙なく瀬戸内海のあかぬ景色を送り迎へて、船は難波の津に着きました。直ちに上京參内して天皇陛下に拜謁し、恭しく歸朝の旨を言上されますと、陛下は殊の外御色麗はしく、留學中の勞を御慰問の御誼を賜りました。大師天恩の渥きに感泣し、請來の經具全部を献上されすと、陛下から「眞言の教を天下に弘通よ」とお勅許が下りました。大師はこれより公然眞言宗の開祖となられたのであります。御前を退いて直ちに岩淵寺に勤操大徳を訪ね、無事の歸朝を告げますと、大徳も非常に悦ばれたのであります。當時智泉は立派な一沙門となつて居たので、大師は亦智泉の手を把つて打喜ばれました。數日此所に滞在して居ると先に室生山にて將來を約した堅惠といへる人、大師の歸朝を聞いて訪ね來て弟子となりました。又眞紹といふ當年僅かに十歳の可愛らしき弟子を得ました。

大師は智泉堅惠の兩弟子を伴うて、初めて大日經を發見した大和國高市郡久米寺に至り、東塔院で初めて大日經をお説きになりました。これが我國で本經開講の最

初はつでありますゆゑ、南都諸大寺の高僧大徳かうそうだいとくいづれも法席ほふせきに参まゐじ、大師だいしの新説しんせつを諱聽ごんちやうしました殊ことに聽衆ちやうしやう中に實慧じつゑといふ人あり、大師だいしの大日經解説だいにちきやうげせつを聞いて、自分じぶんの今いままで研究しやうきやうせる教をより、適はるかに深遠しんえんなるを悟さとつて、直たひに大師だいしと師弟ししていの契ちぎりを結びました。實慧じつゑは矢張やはら佐伯さへの一族いっくで、書博士しよはかせ佐伯さへ直ちか葛野かの鷹たか卿きやうにつき儒教じゆけうを學まなび、後佛道のちぶつだうに志こころざして出家しゆつげし、大安寺だいたんじ泰基たいき法師ほふしの門もんに入はいつて唯識ゐしきの蘊奥うんかうを研をさめました。後のちには大師だいしの高足かうそくとなつて道興だうかう大師だいしと諡號おくりなを賜たまはり河内かはちく觀心寺くわんしんじの開山かいさんであります。

次つぎいで開宗準備かいしやうじゆんびのために、大師だいしが得度とくどをした横尾山まさをさんに登のぼりました。此この事こと早くも朝廷てうていに聞きこえて、同山どうざんに假住かりやまひせよとの通知つうちがありました。續つひいて課役くわいやくを免めんずる旨むねのお達たつしがございました。時ときに大師だいし三十五歳さんじゆうごさい、大師だいし思おもふやう「日本にほんには日本にほんに適かなつた布教ふけう法ほふがなくては勞多らうたくて益鮮えきせんし」と、こゝに大師だいしは日本にほんの國體くにがらを基もととし、諸教しよけうを參酌さんしやくして上根下根じやうこんげこんの隔へだてなく、漏もらさず救すくふといふ有難ありがたい眞言宗しんごんしゆを開ひらかれたのであります。

あ、高たか雄を山さん

横尾山まさをさんに居かること一年ねん、開宗準備かいしやうじゆんびも出來でき弟子等でしとらの學徳がくとくも大おほいに進すすみました。依よつて天臺山てんだいざん最澄さいじやう法師ほふしの許もとへ名刺めいしを通つうじて親交まじはりを求もとめました。同師どうしは既すでに歸朝きてうして居をつたので、互たがひに協力きやうりやくして佛法弘通ぶつほふくわうのため盡つくさんとせられたのであります。當時たうじ天皇てんのう御惱おんなやみあつて御位みくらひを皇太弟くわうたいていに讓ゆづりました。これが嵯峨さか天皇てんのうで、最もつとも大師だいしを尊信そんしんせられた御方みかたであります。眞言宗しんごんしゆが迅速しんじゆんに弘通ひろめられたのも、偏ひとへに嵯峨さか天皇てんのうの庇護おかげでありました。そして先帝せんていを尊たうごび太上たいじやう天皇てんのうと申まを上げ、太上たいじやう天皇てんのうの第三皇子だいさいわうじ高岳たかをかしん親王くわくわうを皇太子たいしと定さだめられました。天皇てんのうにも皇子わうじは數多あまたありましたが、故ゆゑあつてかくされたのであります。大師だいしは久ひさしき山住やまやまひに、此この邊あたりの消息やうすは少すこしも御存ごぞんじがなかつたのであります。

大師だいし聊いさか祈念きねんがあつて、實慧じつゑ並ならびに智泉ちせんを伴ともなひ横尾山まさをさんを北東ほくとうに越こえ、河内かはちく國くに石川郡いしかはこほら

平石の嘉宇下山に至つたのであります。こゝは幽邃な靈地で、昔役の行者小角が此の奥に住つたことがあるといふのであります。大師はこゝに夏籠りの草庵を結ばれました。そして大師は一人山を下り、程遠からぬ聖徳太子の御廟に参籠し、密教弘布のことを祈念したのであります。ある夜聖徳太子示現たまひて、「汝は吾が後身なり」と宣べられたので、大師ありがたくお思召され其の由來を傍らの石に記されました。やがて草堂に歸つて修練せられたのであります。ある夜の拂曉でありました。木の間より奇しき鳥の聲が聞えましたので何心なく耳を澄せば「佛法僧」と啼くのであります。大師不思議に思はれましたが、此の靈山に此の靈鳥があるかと感心して居られたが、やがて興が湧いて次の一詩をお作りになりました。

閑林獨座草堂曉

三寶之聲聞一鳥

一鳥有聲人有心

聲心雲水俱了了

これは名高い詩で、當時の大師の心持をよく現はしてあるといふのであります。後此所に一寺を建てました。高貴寺がこれでありす。大師再び棋尾山に歸ると「出京せよ」との勅命がありましたので、直に弟子を伴つて上京参内されました。天皇陛下に拜謁仰せ付けられ、種々ありがたき御誼を賜はつてから永く京に居住せよとの仰せを蒙りました。これ新帝陛下が深く大師を信ぜられたからであります。又此の時、和氣眞繩卿に招かれて、洛西、高雄山に入られました。同卿も亦大師にふかく歸依して居ましたから、この寺を大師に献納されました。同寺は稱徳天皇の御宇、和氣清麿卿が勅を奉じて、宇佐八幡へ参詣の砌り、八幡菩薩の神勅に依つて建立した名刹であります。此の頃宇佐八幡が姿を現はされたので大師その尊容を描かれました。八幡菩薩も亦大師の御影を圖せられたといふことで「互の御影」と申すのがこれであります。此の頃大師灌頂の職位を初めて實慧に授けました。又最

澄法師より經典借用の申込がありましたので大師は快く承諾されました。又大師の御幼弟が訪ねて参り、大師の門に入られました。是れ後の眞雅僧正でございす。大師の一家は佛縁深く、大師の御末弟の子亦大師の門に入る。高野山第二世眞然大徳がそれで姉上も夫に死なれて尼となり、御妹の子は三井寺の開山智證大師眞珍僧正、大師の出家に反對せられた叔父大足太夫も晩年東寺に入つて、寺務を執り大師を助けたといふことでもあります。

の、薬子の亂

茲に端なくも國家の大事が起りました。それは太上天皇が再び御位に即かれるといふ噂であります。嵯峨天皇はこれが爲めに深く宸襟を惱ませられ、一日ひそかに大師を召されたのであります。大師何事かと急ぎ参りすれば、天皇直々今回の事變に就いて御言葉がございまして『太上天皇去年南都に御幸せられて重祚の希望があ

るといふことであるが、これ疑ひもなく、御寵愛の尙侍薬子とその兄仲成との計ひである。これ天下亂脈の基であるから、速に八幡菩薩に祈願して災を未發に鎮めよ』との勅でありました。大師は直に御命を畏み、早速東寺に於て一大祈禱を行ふ準備を急ぎました。是れは一に國家の大事であると共に、又實に眞言興廢に關する事でありますから大師は熱誠を置いて祈願されました。そして息災護摩師を實慧に、増益護摩師を堅惠に呪頭を智泉に命じ、別に五大尊供、十二天供、聖天供、神供、舍利守等の諸役を設け、夫れ／＼壇を築いて、大師御自身は大阿闍梨として祈禱を行はれました。壇上の壯華嚴麗なことは眼もまばゆいばかりで、この大道場で大師が一心不亂の大祈禱をなされたのであります。丁度滿願の夜でありました。立ち昇る香煙の中に八幡菩薩が武内宿禰を随へて示現せられました。大師等これを拜してその瑞相であることを喜ばれたのであります。果せる哉、間もなく仲成は紀清成の矢に仆れ、薬子は己の望み叶はじと毒を仰いで自害しました。太上天皇及皇

太子も頭を圓うせられたので天皇初めて安堵せられたのでありました。是れといふのも大師の徳と、眞言の威力でありまして、眞言の光輝はいよく如はつたのであります。而して又大師は一層陛下の尊信を受けました。又大師は祈禱満願の時、示現した八幡菩薩の御像を彫刻してこれを朝廷に奉つたとも申します。後大師は國家鎮護の爲め、仁王經を高雄山に修法せんことを上奏して勅許を得ました。そこで始めて此の法を修することになりましたが、それは大師本心の發露であつて、大師の心中には國家鎮護萬民利濟といふことが充滿て居たのであります。此の年東大寺別當に勅任せられましたので、こゝに南院建立の工事を督しましたこれ後の眞言院であります。當時此の寺には大蜂が住んで居て、人に害を加へましたから、學僧次第に滅つて寂しかつたのですが、大師が移住の後は大蜂も姿を隠し、遂に現はれぬやうになりましたので、學僧次第に増したと傳へられてをります。

お、即身成佛

弘仁元年二月十五日でありました。天皇佛敎尊信の餘り、各宗の宗義を聽聞せられんとて、各宗の大徳を清冷殿に召集せられました。いふまでもなく大師も其の御一人でありました。天皇は正面御簾の中に出御あり、公卿百官の居並んだ所で、宗義論難がありました。眞言宗は旭の昇るやうな勢でありましたけれども、日本に傳つてまだ日が淺く、殊に大師は新に即身成佛の妙理を唱へられましたから、論鋒は次第に大師に集つたのであります。大師元より論争は好まれなかつたのであります。すが、場合が場合とて黙しても居られず、そこで徐ろに口を開いて滔々と眞言の本旨を示されました。其の説く所、總て玄理でありますから諸大徳も次第に口を噤んで反抗せず、皆この新説を謹聽しました。時に天皇の御聲があつて、「説く所悉く玄理であるが、朕はその實證を見ん」と、大師仰せを畏み直に南向つて默念結印

すること少時、忽ち殿中に光明輝き、頭に五智の寶冠を戴いた大日如來が現はれま
 した。眼前に即身成佛を實證せられたので一同座を退いて頻りに禮拜し、天皇も玉
 座を進ませ給ひて禮拜せられたのであります事實の前に議論はない。諸大徳みな隨
 喜し、中には大師と師弟の契りを結べる人も少くなかつたのであります。有名なる
 八宗法論と申すのはこれでありす。大師は又眞言宗の本旨から見、神佛一體を
 唱へました。神と稱し佛と申すも名こそ異なれ、之に依つて諸人を教化する功德は
 同一である。故に神を信するは佛に歸依すると同じで、佛に歸依するは神を信する
 と異りはない、その精神は皆一である。かういふ考へから、佛敎と神道の合一を計
 られたので全く印度から傳つた佛敎を、日本の佛敎としたのであります。大師の
 心は常に國體を基とし修法の本願を神明に誓はれたのであります。聖徳太子も、行
 基菩薩も共に神佛調和に苦心せられましたけれども完全に纏つた説ではなかつたの
 であります。これを完成せられたのは實に大師であります。大師御事業中最も心力

を盡されたものも是れであります。弘仁二年二月一日大師は嵯峨天皇と御同列で、
 宮中の齋所に於て神祇大副中臣智治鷹野より、神道の灌頂を受けたと傳へます。天
 皇御年二十五、大師三十八歳でありました。天皇師範智治鷹野、及び大師に素絹を
 下さつたので、大師は之を着用しやうとなされたけれども、圓頂に烏帽子も妙で
 ありますから、工風されて素絹の襟を延し、相好と名けて帽子のやうにしたのであ
 ります。後世これを三角形にして素絹の衿に着けたので、其の濫觴は大師でありま
 す。

く、法を授く

今は東大寺南院の工事も進んで、略ぼ落慶に近づきました。すると今度は山城國
 乙訓寺の別當に兼補せられ、其の修繕の任に當りました。同寺は推古帝の御願に依
 つて聖徳太子の開かれたものであります。

此の年天台山最澄法師が眞言傳法の事を申込まれました。翌弘仁三年十月二十七日最澄法師は大師を僧房に訪ねられましたので大師も喜び迎へ、一別以來の挨拶を終ると、話は佛教の上に移り、互に打とけて夜の白むまでも語り續けたのでありました。此の時大師は御自身支那から持つて参られた新茶を入れて最澄法師に進めたと申します。又當山の境内には柑子が澤山ありました。これを千夥ばかり取つて唐櫃に納め弟子をして朝廷に献しました。幾何もなく同寺の修理出来しましたので、辭して高雄山に歸られました途中久方振りで、参内して天機を奉伺されました。時に天皇諸公卿と書道の御物語中でありましたが、多くの軸中より秀れし一軸を抜き之を大師に示し仰せらるゝやう「此の書、唐人の筆にてまことに見事である。しかし惜しきことには落款がない、師、知れりや」と、大師恭しくこれを拜見し、やがて恐る恐る言上して曰ふには、「この軸は少僧の筆に御座ります」と。されど天皇容易に信じ給はず、大師重ねて申すやう「その軸の合目を解きて御覽候へ」と。天皇

試みに合目を調べになると、果して大師の名がありました。これを見て天皇も大に驚かれたと申すのであります。天皇と大師と橋逸成卿とは日本書道の三聖といはれ、就中大師は我國書道の開祖と敬はれる程でありますから、参内する毎に天皇と書道の御問答があつたのであります。

最澄法師は十一月十三日灌頂の調度品を届け翌日自ら高雄山に登つて参られました。名僧公卿の同時に登山した者も澤山ありました。眞言秘法は一切衆生皆即身成佛が出来るのでありますから、道俗の別なく灌頂授法を許されたのであります。踰えて十五日最澄法師を初め一同は、金剛界大曼荼羅に向つて大師の灌頂を受け、十二月十四日胎藏界灌頂を授かつたのであります。最澄法師と同時に灌頂を受けた人数は實に百四十五人で、皆當山に滞在して居たのであります。最澄法師と大師とは、どちらも一宗の開祖でありながら、大師の方からは禮を厚くして交際を求め、最澄法師はまた大師の灌頂を受けたのであります。兩師の心量の廣いことは後

の世までの語り草となつたのであります。
翌年正月になつて最澄法師は自分の弟子圓證、泰範、賢榮を大師に托して、深く眞言の立理を學ばせたのであります。

や、南 圓 堂

大師山に籠つて澤山の門弟を教育してお在になりました。されば常に米鹽に乏しかつたのであります折しも、田中八月鷹卿上京の報に接しましたので、大師は窮状を書き送つて施與を求められますと、間もなく澤山の食糧品を山のやうに贈つて來ました。これを受けた大師のお喜びは手の舞ひ足の踏む所を知らぬといふほどであつたとは、勿體なき極みであります。

藤原賀能卿は先年唐に渡る時神々へ立てた誓を果す爲めに、暇々に般若經一百卷を寫し、漸く書き上げたとして、大師にその願文を頼んで參りました。大師も同様

の誓を立てましたが、多忙い爲め果し得なかつた所とて、喜んで之に應じました。

又此の時分最澄法師の許から屢々經典を借りに參りました。

又大師は東大寺別當の任期が満ちましたので、東大寺に來て寺務の引渡しをされました。この時藤原冬嗣卿、一門の次第に衰え行くを憂ひ、大師に相談しました。大師も共に同情して、藤原家の祈願所なる奈良興福寺内に八角の堂を建立することをお勧め、大師自から刀を執り、不空絹索觀世音の像を彫刻して其の堂に安置することになりました。これを傳へ聞いて多くの人々が手傳に來ましたので、工事は意外に捗どり、忽ち立派な御堂が出来ました。これが彼の南圓堂で、西國三十三ヶ所第九番の靈場であります。そこで壯嚴な鎮壇供養を行ひ、非常の賑ひでありました。集つた人々は

ふたらくの、みなみのきしにすまひして

きたのふちなみ、いまださかゆる。

と謠つて此の目出度き落慶を祝つたのであります。この歌が誰れの作とも更に分らず。春日明神の神詠であらうとて、一同崇敬はぬはなかつたのであります。これから藤原家の一門再び榮えて昔にまじ繁昌しました。是れ偏に春日明神並に大師の御蔭とて、藤原一門代々この報恩につとめたのであります。

ま、寫經を奨む

大師高雄山に歸つてからは、専ら弟子の教養と法務に勤め、暇があると文墨に親しまれました。嵯峨天皇勅使を立て、大師の近況を問はせられ、慰問として綿百屯に一詩を添へて下賜せられました。大師一再ならず天恩の渥きに感泣し、一詩を作り、書面に添へて御慰問に奉答しました。時に弘仁五年三月でありました。七月更に勅使を受けて數卷の書籍を献上し、天覽に供しました。或る日元興寺故賢璟大僧都の法弟圓璟といふ人が來て、大師に哀願していふのに

「自分と同法の沙門中璟は破戒の所行があつたといふ處で罪を蒙りました。何卒大師の大慈悲を以て救濟下され」と懇願しました。大師不憫に思ひ、快く受合はれますと、大に喜んで歸りました。そこで大師一文を認めて天皇に上ると、天皇も大師の熱誠なる願文を御覽せられ、直に此の罪僧赦免の勅が下りました。いましめを解いて歸坊を許されたので、圓璟及び中璟は涙を流して大師の恩を謝しました。實に大師が南都諸大寺のために盡力したことは非常なもので、此の外多くの罪僧の赦宥を懇請されました故に、衆僧皆大師の高徳に歸服しないものはなかつたのであります。此の頃伊豫部連眞貞博士下野守の任期が満ちて上京し、一日大師を訪問し東北地方の近況を物語つてのち、談は勝道上人の事に及びました。此の人苦心して補陀落山に登山、頂上に一寺を建立し、神宮寺と名づけたが、まだ山上に何の記もない。それゆゑ上人も深くこの事を残念に思はれ、豫てより大師の高徳を慕うて居る所から、是非大師にこの碑文を頼み呉れよと余に托されました。何うか御聞き

届け下されたしと懇請しましたので、大師も上人の徳に感じ、こゝに一文を書いて博士に渡ししました。博士は喜んで持歸りました。所が、之れが縁となつて、後に大師もこの山に登らるゝやうになりました。翌年秘藏の經文を寫させて世に弘めんとおぼしめし、大師は弟子等を東國に遣し、下野常陸の高僧に助力を求め甲斐常陸の官人を訪ねて書寫を勧めさせました。併し充分に行渡りませんでしたから、茲に一大勸進の文を作つて廣く天下に告げられたのであります。

其の年有望な少年の弟子を得ました。それは武内宿禰二十代の孫に當る紀朝臣御園卿の子息で天性聰明でありました。時に僅かに十六歳、大師の高風を慕つて入門したのであります。大師の徳望と名聲とは益々高くなつて、日々訪問の客絶えず、また入門を乞ふものも非常に多くて一日も落付いて居られませんでした。そこで高野山をお開きになることゝなつたのであります。

け、山開き

弘仁七年大師四十三歳の御年でありました。一には眞言永代の基礎を築き、又一には御自身禪定の所を定めるために、その靈地を探ねて唯一人高雄を出て、紀州の山中に分け入つたのであります。途中で豊田丸と言ふ人に、地形の優れた所があるを聞いて山奥に進んで行きますと、或日のこと、黒犬と白犬とを引いた頑丈な一獵夫に出遇ひました。件の獵夫大師を見て莞爾と笑つて「上人何れへ參らるゝや此の邊りで見掛けぬ御僧であるか」と問ふた。大師「御身は此の邊りの地理をよく知らるゝであらう、よき靈地あらば教へたまへ」と申すと「よい、俺は南山の犬飼で名もなきものだが、一萬餘町の靈地があるのを知つて居る。道は此二犬が知つてゐるから案内致しません」と、二犬を呼び立てますと、二犬は嬉しげに先へ立つて行く。大師厚意を謝して犬の後に躑いて進み、振返つて見れば、もう獵夫の姿はあり

ません。是れはキツト神佛の御導きであると喜びながら、進む中に日が暮れて。紀の川の畔りに出ました。川向ふに微かな燈を認めましたので、其處を訪ねて、一夜の宿を求めると、老夫婦が居て、快く招じ入れました。四方山の話の序に己の望みを語ると、老主人がその靈地を知つてゐて案内してくれることになりました。翌朝老人と二人で尙ほも山中に分け入れれば、果せる哉一大靈地に出ました。此の邊りは大師が二十年前に跋渉した所で、一木一草も思出の種でありました。時に老人改まつて「我は此の山の主なり。今わが領地を上人に献じて威福を増し申さん」といはれました。其の神々しい聲が止むと、木の間がくれに姿が見えずなりました。抑も此の地は三面に高い峯がそり立つて、其の中には八ツの大きな山と、九ツの深い谷があり、谷からは三十六の川が東を指して流れ、開けた所は巽の方ばかりであります。八ツの峯は蓮華の花弁の八ツを現はして居り、九ツの谷は尊い佛の數の九ツに當つて居ります。そして八ツの峯は又内外二重になつて居て、それ〴〵名

稱があります。山の形は東西に連つて居るのは龍の臥して居るやうであり、南北は虎が踞まつてゐるやうであります。其の上には生えて居る木はと見れば何れも千年も経つたらしく、枝葉が生ひ茂つて幹は雲に届きさうであります。奥深い森として、又神々しい氣分がたゞよつて居る。實に又と得難い靈地でありました。

ふ、三三三の松

こゝに於て大師は此の地こそ我が禪院建立の場所であると大に喜ばれたのでありました。此の獵夫は即ち今日の狩場明神であります。兎角して居る内大師は見るともなく、四邊に心を配り年ふりたる一本の公ケ枝に眼を付けますと、キラ／＼と光る或者が其所に懸つて居りました。不思議に思召してよく／＼見れば、嘗て唐から歸りの時、乗船に先ち三三三を投げて靈場をお示し下されと祈つたその三三三であつたと申します。そこで大師は此の地を佛のお導きになつた靈地であるからとて、

いよく決心を固められたのであります。

かくて此所を見分してのち、道案内の二匹の犬と共に歸途に着きました。所が不思議や何時の間にかまた犬の姿を見失つてしまひました。それから大師はたゞ一人山路を辿るうちに、ふと小澤のところに出ました。見ると其の邊りには小やかな祠があつて、其中に人の居るようや氣色がします。近寄つて見ますと一人の巫祝が出て来て、何かと物語つて居る内に其の巫祝に神が憑りました。そしていふには「妾は丹生津比賣である。妾神の道に在つて久しく威福を望んで居た。今菩薩の此の山に來られたことは妾の最もよろこぶところである。冀くは永久に此の山を獻上して信仰のしるしと致したい」と巫祝は、忽ち元に復つたのであります。大師は色々瑞相によるこぶこと限りなく、此所を辭して勿皇歸山されました。

大師が四國八十八ヶ所の靈場を開かれたのは、高野山を檢分せられた前後のことです。序に此所に申し添へて置きます。其の八十八ヶ所の起因といふのは、

大師が先に唐に參られたとき、般若三藏からお釋迦様の靈地八ヶ所の塔の土を傳へられて持ち歸られました。其の八を見惑といふ煩惱の數に擬へて、これを十倍した八十に、元の八を加へたのであります。それを各地の靈場に配納して四國八十八ヶ所をお開きになつたのであります。

阿波土佐伊豫讃岐の四ヶ國を一周すれば、其の里程ほとんど三百六十里、實に無類の大靈場であります。また其の途中は何れも景色の勝れた所でありまして、心に煩悶あるものや肉體に疾病あるものが、此の靈場を巡禮しますれば、利益忽ちあらはれて、身心共に強健に復ことは申すまでもありません。今も尚ほ老若男女の區別なく、日本國中から此の靈場に巡拜する人々數知れず、そして不思議は更に絶へませぬ。

一、高野を賜ふ

大師都に歸つて、早速上表して高野山七里四方御下賜のことを願はれますと、天皇、御覽あつて一應有司に計つた上で勅許となりました。時に弘仁七年七月八日、同二十八日紀伊の國司と三郡司に御達しがありました。そこで大師は弟子信叡を高野へ遣はし詳しく探らせ、次で實慧泰範の二師に申付けて山上に一二の草庵を造らせたのであります。

時に勅使が參つて、五彩の吳綾に錦の縁をとつた五尺四帖の屏風一雙持參し、これに古今の秀句を揮毫せよとの御命であると傳へました。是に於て齋戒て揮毫の上八月十五日に献上しますると天皇これを御殿に立て、その見事な筆蹟をお賞めになりました。一詩を賜りました。此の頃先師勤操大徳六十三歳の老體を以て高雄に大師を訪れ、自分の弟子であつた大師を拜し、金剛、胎藏兩界の灌頂を受けられました。

又大師は支那から歸朝する時、菓子くわしの製法せいほうも覺えて參られたが、これを小倉の和郎といふ人に傳授して作らせ、燒菓子と名づけて朝廷に献じました。天皇その風味を賞美せられ永く其の者に御用を仰せ附かつたといふことであります。

一日天皇御不例の事が傳はりましたので、大師は取るものも取りあへず、檀上に薬師如來を勸請して弟子と共に十月の初旬から一七日の間晝夜の分ちなく、御惱平癒を祈られました。満願の日、加持水一瓶を弟子眞朗に持たせて之を献上し、薬石と共に開食すやうにと申上げさせました。處が大師の誠忠は佛陀も感應ましく、けん。さしもの御惱も次第に快復し、一週日の後には早や假床を拂はせられました。これより天皇の御尊信彌々加はるに至りました。

翌年の夏、大師は智泉等を伴つて高野に登り、伽藍の基礎を定めるために、先づ四域の境界を修しました。『東西南北四維上下七里の中、一切の惡鬼神はこの結界を去れ、あらゆる一切の善神等利益あるものは隨意停住せよ』といと嚴かに啓白され次いで伽藍建立の結界を修する爲めに、金剛軍荼利菩薩法に歸命して七日七夜懺悔

禮拜し、こゝに高野山金剛峯寺の基礎を定められたのであります。

え、疫病を除く

弘仁九年の春は天候非常に不順でありました。其の爲めに大に疫病流行して、都大路も死人で埋まるといふ有様でありましたので、大師は藤原冬嗣卿等の助力を得て施樂院を立て、曩に唐から持ち歸つた藥草をば、加持水で煎じて廣く施與されました。

天皇も亦疫病の流行に就いては一方ならず宸襟を惱ませられ、大師と御相談なすつて、御手づから紺紙に金泥もて、一字毎に三禮いたされつゝ般若心經を御寫しになりました。大師は勅命を受けて廣澤池の畔嵯峨院に於て供養いたしました。平常粗末な衣を着て居る大師も、此の日は金色の衣を着け徐々と壇上に登つて、件の心經を奉安し、契印の後、右手に寶劍を執り、左に水晶の珠數を持ち、威儀嚴かに

講讀せられました。金泥の心經と金色の衣とが光り輝いて、其の立派さ譬へやうもありませんでした。天皇も臨幸ありて、深く御感遊ばされました。今ある心經秘鍵といふのは、此の時大師講演の草稿であります。すると天候も順調となり、さしもの疫病も忽ち熄みましたので、萬民は天恩の渥いのと大師の徳とを有難からぬはなかつたのであります。

此時分宮城十二門の修繕に取掛つて居りましたが疫病の爲めに中止になつてゐたのを、又工事を進行させて漸く出来上りました。そこで各門の額はそれぞれ書の大家に書かせられました。大師は南側の美福、朱雀、皇嘉の三門と、正殿の應天門とをお引受して、健筆を揮はれました。應て天皇が各門を御覽になつて、應天門の書風が如何にも珍らしいのに御目を留められ、大師に御質問がありましたので、これは投筆の法でございますと奉答になりました。天皇初め供奉の諸公卿皆賞めそやさぬはありませんでした。後世これを誤り傳へて、大師は應の字の上の點を落したの

で、額を揚げてから筆を投げて書き足したなど、申します。又朱雀門の朱の字も奇抜でありましたから、これも手書きの小野道風といふ人が「あれは朱雀門ではない米雀門だ」と嘲笑ひました。その夜、夢中に佛人現はれ強か道風の首を踏付けてこれを誡めたといふお話もござります。

て、いろは歌

この年の十一月、大師は智泉真紹をはじめ、多くの弟子を随へて、高野山の草庵に移られました。この事を傳へ聞いた多くの人はみな悲しみ、殊に天皇は御製を下されて深く名残りを惜まれたのであります。これまでは人氣もなかつた深山も、今は工事の物音や、人夫の音頭などで賑ひました。翌年の春になつて、莊嚴なこと日本一といはれる金堂が出来上り、五月には地主兩社並びに一百二十社を勸請して鎮守とされました。六月一日虎峯から大塔の心材を伐り出して二十八日壇上に運び

ました。是れは伽藍の根本でありますから、少しも穢してはならぬと實慧師に奉行を命ぜられました。柚大工十六人を選び、それを一大法師二大法師に二組に分けて運ばせたのであります。大師は一本の草木や、一介の昆蟲にも真言の功德を授け、柚大工にも成佛の端を得させんものと、こゝに自ら發明せられました假字で涅槃經四句の偈を僅かに四十七字の歌にして柚大工等に唄はせたのであります。

いろはにほへど、ちりぬるを

わがよたれぞ、つねならむ

うゐのおくやま、けふこえて

あさきゆめみし、ゑひもせす

これが今日の『いろは』であることは申すまでもありません。此の内には釋尊御一代の教旨が籠つてをります。音に高野の大柱を建てる爲めばかりではなくて、實に我國文明の基を築かれた萬代不易の大文字で、如何なる稚子も容易く書き習ふこ

とが出来ます。そして此の假名が日本の文學や文明にどれほどの助けになりましたか。は今更こゝに述べるまでもありません。加之これを五十音に排列したのも亦大師なので、取りも直さず片假名も大師が發明せられたのであります。今日では偉い學者達まで漢字を廢せと云つて居りますやうに假名だけで日本の文章は十分であり、また日本の文明が進むといふ程になつたのは果して誰れの御蔭でありませう。大師は實に名僧智識であられたばかりでなく日本の文學と文明の大恩人であります。

莊嚴な大塔も出来ました。そこで金剛樓一切瑜伽瑜祇經に縁を取つて寺號を高野山金剛峯寺と名づけられました。又大師は山内を巡覽して、其の美しい景色に興をそゝられ、これを屏風に描かれました。それが大和繪の起をなしたといふことでもあります。

あ、東北巡り

弘仁十一年七月二十五日大師は東北地方の巡錫を思ひ立ち、高野の造營を賢慧眞然等に托し、眞濟幹海泉隣等の弟子を伴はれて發足されました。東海道を伊豆に出で、走湯山の窟に般若心經を講じ桂谷に結縁灌頂を修せられました。この時此所に温泉が湧き出るのを發見されました。大師はこの温泉で沐浴すれば諸病に効があることを人々に教へられました。大師此の瑞相に感じて建てた御寺が今の修善寺であります。修善寺温泉が今の様に繁榮するのは實に大師の恩澤であります。同寺に弟子泉隣を置いて江の島に立ち寄り、此處で魔神を鎮め、神窟に護摩を焚き夫れから鎌倉を通つて武藏に出で、川崎、西新井などにも夫れく不思議を留めて道々に利濟されつゝ安房上總から常陸を経て下野に下り、補陀落山に至れば勝道上人は最早遷化して、弟子等が出迎ひ、非常に厚遇しました。大師は山上と山下とで祈禱をされましたが、相像よりも其の景色がよいのに驚かれたのであります。此の山春と秋とに暴風を起して、國中が荒されるところから山名を二荒山と申すと聞いて大

師は氣の毒に思はれ。山上の神窟に大祈禱を行はれました。それからといふもの暴風の難が無くなつて、人民の喜びは一方でありませんでした。

又勝道上人の遺弟に眞言の法を授け、二荒山を音讀して日光山と改めになりました。これが今の東照宮を以て名高き日光山であります。それから陸奥の會津郡に參られて惠日寺を建て、徳一上人に授け信夫郡の靈山寺を結界し、更に出羽の月山湯殿羽黒の三山を巡られて、越後路に出で北陸道の雪を踏んで、翌年の春も歸りになりました。此間大師は傳燈大法師並に内供奉十禪師といふ位にのぼられました。時に御年四十七。かくて西は九州、東は上總房州の涯より、北は奥羽越後に至るまで、親しく教を弘められましたので、眞言の法幢は全國に翻へるに至りました。

さ、萬濃池

翌弘仁十二年四月、讃岐國萬濃池の築池使刑部少丞路真人濱繼卿より、大師を

その別當に任命されたしと上奏して來ました。當時大師は智泉と二人で、諸佛の御像制定に従事してお在でになりましたのを天皇も御承知でありましたから、御下命を差控へて居られました。けれども再三願出でられますので、大師に御相談がありました。處が大師國人の苦みを濟ふ事でありますからと、早速御承知になり、今の仕事を智泉に引繼がせられて出發することになりました。此の報を聞いて濱繼卿等はお迎ひに上京しましたので、大師は一同と共に讃岐國に渡り、築池別當として其難工事を監督いたされました。傍ら堤上に壇を築いて修法されましたから、遠近の人民聞き傳へて走せ集り、工事を手傳ひしたので、さしもの難工事も忽ち出來上りました。人々大師の御徳を有難からぬは無く、池水は満々として海の如く、千有餘年の今日までも易りませぬから、農民の利益幸福は數へられぬほどでありました。朝廷では大師の功をお賞めになつて、新錢二萬を下されましたが、大師はそれで三寶を供養し役民一同をお撈りになりました。其の九月弟子達と共に歸りにな

りますと智泉の圖繪も既に出來上つて居りました。そこで大師御自身で龍猛龍智菩薩の像を寫し、唐から持ち歸つた五祖の御像を修繕して讃をお書きになりました。諸佛の像を制定められたのは實に大師で、九月七日には其の二十四鋪の御像を供養され、又先頃薨去した藤原賀能卿のために、供養して知己に酬ひたのであります。

き、高、岳、王

弘仁十三年二月二日太上天皇の御聲が、りで、東大寺南院を眞言院と改めました。上皇は廢太子高岳親王と二人で、俄に行幸せられて眞言灌頂を受けられました。大師御兩方佛性三昧耶戒の灌頂をお授け申上げました。高岳親王は大師の威儀がさながら生佛なるに感じて、其場で大師の御弟子とされました。

此の時の御歌に、

かくばかり、たらまをしれるきみなれば

たゞぎやたまでに、なりのぼりけり。

と即ち斯くばかり佛法を究めた沙門なれば生れながら菩薩にはなりたまふらんと歸依の心を現はされたのに對して、

いふならず、ならくのそこにおちぬれば、

せつりも、びいやもへだてやはする。

と大師はお答へになりました。平たく申せば、一たび那落の底に落ちては貴賤の別なく佛菩薩の手に救はんとの意味であります。

親王は太上天皇の第二皇子で皇太子に立たせられましたが、藥子の亂の爲めに廢太子となり、髪を落して三論宗を學び、次いで法相宗を究められました。今又大師の門に入られたのであります。御性質が至つて勇敢な御方で、後に唐に渡り天竺に行く途中であかくれになりました。眞如法親王と申上げます。此の御二方が我國に於ける天皇の密灌と、親王入門との始めであります。

此年四月十八日詔に依つて、紫宸殿で兩部神道の説をお談りになりましたところ、天皇深く大師の講演に感心いたされて「兩部神道」の號を下されました。翌弘仁十四年正月十九日藏人藤原良房卿を勅使として、東寺を下さつて永く眞言の根本道場とされ、ついで大師を其の別當に任じ、教王護國寺の勅額を賜はりました。四月十六日嵯峨天皇は皇太子大伴親王に御位を譲り、大師をお召しになつて三密の法門を聽召され、金剛界大曼荼羅に向はれ、智水灌頂をお受けになりました。其時橘皇太后を始め奉り、右大臣藤原冬嗣右近衛大將良峯安世等の諸卿も共に灌頂の壇に上つて三昧耶の戒を受けました。六月一日天台山の最澄法師入寂せられたので、海内の信仰は全然大師の一身に聚つたのであります。

ゆ、雨 請ひ

大師は神託によつて、東寺の巽に當る藤の杜の山上に、稻荷社を建て、明神を勧

請し、東寺の總鎮守とされました。是れ今日の伏見稻荷であります。大師は法務非常に多忙でありましたけれども、年に一度は必ず高野に登ることにして居られました。其の高野山に在る時に、嵯峨上皇から御召がありましたので、上京して一ヶ月あまり中務省に停つて修法されました。新帝淳和天皇は大師が上皇の御召で、度々京と高野とを往復するのを大儀に思召され、途中の宿所にとて大和高市郡飛鳥川原の興福寺を賜りました。翌弘仁十五年正月十一日、改元して天長元年となりました。此の春大變な旱で野も山も青いものとは無く、人民の苦しみは非常であります。天皇深くこれを御心配になり、大師を招んで宮中神泉苑の池の邊に、壇を築き雨乞ひの祈禱を仰せつけられました。大師は身を忘れて請雨經を讀み、七日間一生懸命祈禱されましたけれども、雨は降りませぬ。尤もこの前に西寺の守敏和尚の申出により、和尚に雨請を命ぜられたのでありましたが、効驗がありません。そこで大師は不審に思召

して定に入つて見ますれば、果せる哉守敏和尚が行法を妨げて居たことが分りまし
 たので、更に三日の日延をして熱誠こめてお祈りになりました。すると三日目に天
 候が變つて、大雨が降り出し三日三夜小止みも無く降り續きました。此の時池の中
 から金色の小龍が一蛇に乗り、眞言の奥旨を貴んで現はれました。大師初め弟子等
 はこれを見て直に上奏されますと、御勅使が供物を持ち來つて龍王に供養されまし
 た。天下の大憂を除かれた大師の法徳は、上御一人から下萬民に到るまで有難から
 ぬは無く、特に天皇は其の功を賞して、三月二十五日に少僧都に任命されました。
 四月六日大師は表を上つて御辭退申ましたけれどもお許しになりませんでした。翌
 年天皇の御願で東寺の境内に講堂を建てることになりました。此の年二月智泉法師
 病に罹り、其の十四日遂に高野の東南院で成佛されました。智泉師は高弟中でも特
 に大師が望みをかけて居られて、高野山第二世となるべき方でありましたから、大
 師の御嘆きはお傍で見える目も氣の毒なほどでございました。後智泉の像を描いて懸

ろに供養されました。これを涕の御影と申しまして今もなほ此所に藏められてあり
 ます。此の年平城上皇崩御あらせられましたので、大師は嚴かに佛會を営まれま
 した。此の頃東寺の講堂も出來上りましたので修法されました。又此の年九月には
 益田池の碑文を作られました。

め、種智院

天長三年正月十一日始めて大仁王會を、高野山の政所（後の慈尊院）で行はれ
 ました。そしてまた東寺にお歸りになりました。此の年勸進の表を上つて、東寺に
 五重塔を建てました。此の時六衛八省親王京司等みな用材を曳いて、大師の經營を
 助けました。翌四年五月また大旱、大師は再び勅で宮中大極殿と清涼殿とで雨請
 の祈禱をせられました。大般若を講ずること三日三夜、天皇は又使を畿内七道に遣
 し、幣物を神佛に上らしめました。けれども験が少なかつたので、大師が唐か

ら持ち來つた佛舌利を内裏に運び、法に隨つて灌頂されますと、忽ち大雨が降りま
したので、萬民再び蘇生の思ひをいたしました。天皇その功を賞して大僧都に上ほせら
れました。大師再三辭退されましたけれども、矢張りお引き上げが無かつたのであ
ります。此の年先師勤操大徳が入寂されましたので、大師は懇ろにこの供養をされ
ました。

これより先き大師は藤原冬嗣卿と謀りて、三教院設立の事を企てられましたが、
不幸にして冬嗣卿が薨去せられ、大師も亦東寺大塔建立のことなどで暇がありません
んでしたので、そのまゝになつて居りました。天長五年夏藤原三守卿が、冬嗣卿の
志を繼いで左京九條の邸を寄附して、大師に力を添へられることになりなりました。
そこで同所に綜藝種智院を設け十二月十五日大師自ら院式を定めて開校されま
した當時他にも學院はありましたけれども、皆名門がその一族の子弟を教育するだ
けでありました。そこで大師はこれを遺憾に思召して綜藝種智院を興されたので、

道俗貴賤の別なく入學を許し、その上佛儒道の三教を兼習はせました。夫れ故當時
最も進歩したそして類の無い學院でありましたから、入學者も日毎に多くなつて、
忽ち生徒は滿員といふ有様でありました。そこで良い教師をたのみ、大師御自身も
亦教鞭を執られました。この種智院は實に我國私立學校の元祖で、大師が如何に教
育事業に貢献せられたか分るであります。翌六年先師勤操大徳の遺蹟である大
安寺の別當に補せられました。この時寺の因縁を説いて弟子達に教誡せられました

み、如、意、尼

天長七年春攝津國六甲山の庵から使があらりましたので大師は結縁のため此山に向
はれました。此庵主は元淳和天皇の寵妃でありましたが、發心して或夜潛に宮城を
遁れ、此の山に籠つて懸命に修行したのであります。大師はその志の殊勝なものに
愛で、請に應じたのであります。此の山は遙かに高野と相對して居りましたか

ら、庵主は朝夕高野の方に向つて伏し拜むのが例でありました。大師が登山せられました時に、庵主は二人の侍女を随へ山を下つて出迎ひ、別院を清めてこゝに請じました。庵主は此の山で修行すること既に三年、大師が先に太上天皇のお召で中務省に逗留された時、この庵主も亦大師の灌頂を受け、如意輪供を授けられ深くこれを持誦して居ましたが、これより閑寂を愛する志が益々痛切になつて、一夜天女のお告げを受けて發心し、天長五年二月十八日の夜大内を逃れ出たのでありました。こゝに登山して精舎を結ばうとしますと、郡吏や土民が聞き傳へて、手傳ひ呉れましたから忽ち出來上りました。この時にも大師に願つて如意輪法を修行して頂いたことがありました。庵主は自分の思ふ所を述べて、得度したいと頼まれましたけれども、大師は容易にお許しなさらないうで、此人の身體程の如意輪觀音の像を彫刻して與へられました。そして大師が讃を上げて禮拜されまると、その像が點頭たので、庵主は有難涙に咽んだのでありました。庵主また大師に常住の守護佛を何天と

すればよろしきやと問はれますと、辨財天を持念されよとのお答へでありましたから、これより庵主は辨財天の修法に力めました。すると或夜、天女影現して申されるに『吾永く此の山に住まつて一切貧乏の衆生を救ふべし』との靈告がござりました。

翌八年十月十八日山上に大殿が出來上りましたので、大師に就て髪を剃り戒を受けて尼となり、如意尼と申しました。此の大殿が神呪寺であります。二人の侍女も同時に髪を剃つて、如一、如圓と申しました。承和二年三月二十日でありました。如意尼は一心に呪を修しつゝ西に向つて永眠れました。實に大師に先立つこと一日、年三十三でありました。

し、山に籠る

大が平安の京に歸ると、八宗の重立つた人々に勅が下りまして、夫々自分の

宗旨を書いて奉れといふことでありました。そこで大師も十住心論といふ題で、十冊に書いて献上されました。これは外の宗旨と眞言宗とを較べて、眞言が一番貴いことを説かれた名高い法論であります。他の宗でも夫々書いて奉獻しました。すると天皇は大師に勅して『これは餘りに大冊で、要點を捉へがたいから、更らに主な要點を認めて獻ぜよ』と仰せられました。そこで今度は『秘藏寶鑰』といふ一巻を上りました。同八年九月延暦寺の圓澄大法師以下三十六名の高僧が、眞言の宗義を學びたいといつて、一同連名で申込みがありました。大師此頃病に罹られたので表向きの務があるそかになつてはならぬと、僧都の役目を辭退されましたけれども、天皇は色々と慰め諭してお許しがなかつたのであります。又大師は高野山で萬燈萬華の二會を始めて修行されて諸佛を供養し、次いで高野に隱栖して穀類を用ゐず、専ら坐禪を好まれたのであります。天長十一年正月から承和元年となりました天皇太子正良親王に御位を譲られました。これが仁明天皇であります。大師

は詔命で出京し、中務省に於て御修法を勤められました。それから暫らく東寺に滞在して心經を講ぜられました。又比叡山西塔院の供養會に出向けとの仰せで、實慧眞濟眞雅道雄眞然圓明の六大弟子を引連れ、三月晦日同山に登つてこの會を勤められました。再び東寺にお歸りになつて、同寺を實慧に高雄山を眞濟に任せて、他の弟子等と西大門を出で、高野に登られました。その時西大門の濠に不思議にも一株の蓮が時ならぬ花を開きました。これから此の門を蓮華門と改めたといふことでもあります。此の年九月大師入定所を定め、それく各寺を弟子等に付囑されました。十二月上奏して宮中の最勝講をば、正月後七日の御修法に改めて、永く國家の式と致されるやうにとお願ひになつて、直ちに勅許がございました。

あ、御 孝 養

大師は高野へ歸山の途中、紀の川の邊りで計らず母公に邂逅はれました。母公は

大師を慕ふて長の道中を遙々と、高野に向ふ所でありました。互に涙を流して喜びになり、大師は母の御手を把つてこの川を渡されました。この時遽かに烈しい雷雨があつて、全く、進みも、退きも出来ませんでした。大師は思はず傍らの岩を押上げて、母公をそこに避難させられましたといふ。大師の御孝心深きことが偲ばれて尊きことであります。

母公は大師と共に高野に登りたいと望まれましたが、女人禁制のことを告げて山下の慈尊院に案内され、此所に同行の親族等を侍らせ、大師は一先づ山に歸られましたが、其後も度々御見舞になつて孝養を盡されたのであります。母公は大師の弟子になつて我子の眞雅や孫の眞然にも遇ひ、同族の實慧道雄等も眞實の母のやうに仕へましたので、老の身を楽しく安樂に送つて、八十三歳の高齡で眠るが如く大往生を遂げられました。大師初め一同の悲哀は一方でありませんでした。やがて其の遺體は丁重に加持して、全身を舍利もて覆ひ、この窟に埋めて手厚く供養せ

られました。

ひ、御修法

承和二年正月、勅命で大師は大雪の中を上京し、始めて宮中の眞言院で正月後七日の御修法を勤められました。永代の儀式であれば、後々までの規範となるもの故、非常に厳かに行はれました。かくて大師は最初にして最後の御修法を立派に勤めて、よそながら上皇や天皇に今生の御暇を告げ、御所を退下つて高野山に歸られました。

今は弟子達の學徳も進んで、大師も心に残ることゝもなければ、歸山の後は全く穀味を斷つて坐禪にのみふけられました。弟子達が氣遣つて色々申上げて、更に御聞入れなく、それでも勤行は常と變るところが無かつたのであります。或日大師は實慧大徳を招いで遺言されたので、實慧師は悲しさに涙は止めどなく流れ

ました。次いで多くの弟子達を招集めて最後の遺誡がありました。

吾れ深く穀味を厭ふて専ら坐禪を好む。是れ皆、法をして久住せしむる勝計、並に末世後生門徒等が爲めなり。方に今、諸の弟子等諦に聽き諦に聽け、吾が生期今幾くならず、仁等好く住して慎んで教法を守れ、吾れ永く山に歸らんとす。吾れ入定を擬すること、今年三月二十一日寅の刻なり。諸の弟子等泣悲むこと莫れ。

と一同この御言葉に頭を上げ得るものはありませんでした。時に三月十五日、日は一日と大師が御入定の時に近づく、弟子達の悲しみは身も世もあらぬ有様でありました。眞如法親王は繪が上手でありましたから、末世の弟子達のためにとて、お次ぎでひそかに大師の尊容をお寫しになりました。ところが大師は早くも悟つて『吾れ開眼せん』と御自ら其の御影に點睛られました。今高野山の御影堂にありま

すのがそれでありませす。

も、御入定

三月二十一日もいよく明日と迫りました。弟子達は背から次房に詰め切つて、彌勒菩薩の法號を間断なく唱ふる中に、時は次第に移つて二十一日の曉寅の刻となりました。雲は低くたれ寂として一山聲もありませせん。大師は跌坐のまゝ大日如來の秘印を結んで、遂に奄然大禪定に入りたまふ。

時は正に承和二年、御年六十二、法臘四十一でありました。弟子達は御榻を圍つて、盡きぬ涙に悲しき聲を擧げ、彌勒菩薩の法號を稱へながら、大師を拜みすれば、さながら生けるが如く、儀容儼然とし少しも變つた所は無く、唯だ御眼を深く閉ぢ給へるので、僅かに御入定と知るのみでありました。御定身は其の儘で七七四十九日の御忌を修めましたが、顔色は少しもやつれず、髪は次第に伸び光澤も失せませんでしたから、剃刀をあて、御衣を更へ、五十日目に七人の高弟が交々輿を

肉身に三昧を証して慈氏の下生を待つ。

とお答へがあつたと申します。これより毎年御衣更への御式が行はれ、勅使の参向がありました。又正月後七日の御修法は、承和二年大師が始めて宮中で修行せられてから、以來一千百有餘年の今日まで引繼いてをります。今は宮中の御都合で京都東寺に於て行はれます。毎年正月八日から一週間初中終の三日は特に勅使が参列し、陛下が一年中の御召物を奉安して、聖體安穩國家泰平をお祈り申すので實に最高最尊の御修法であります。結願の後警官が護衛してそれを宮中に返納いたしますのであります。

大師嵯峨天皇の尊信を受けられてから、引續いて歴代天皇の御歸依ふかく、入壇灌頂若くは落飾入道いたされました御方實に十三方、親王皇子の入道は二百餘人及びました。特に後宇多天皇は「我法斷廢すれば皇統共に廢せん」とまで遺詔せられたほどでありました。天皇御在世の折には自ら大阿闍梨として仁和寺をお開きに

なりました。尙後三條天皇から即位灌頂の御儀があり、また、高野山に行幸せられ或は紺紙に金泥で書いた心經の宸筆を奉納せられました。大師がこの宗旨を開かれから、歴代の天皇七十一方一千百餘年の間、皇室と眞言宗との關係は大變深かつたといふことは前にも申しました通りであります。皇族公卿大官武將の信仰して高野山に登られた数はまことに多く、各宗の名僧大徳で登山して灌頂を受けた人々少くないのであります。況して一般人民の信仰は非常なものであります。大師の餘光は實に大正の今日までも、否や萬世までも滅することではありません。

書を御書きになつた数は二百餘卷、國家の爲めに修法されましたことが前後五十回、灌頂を受けた弟子は何萬といふ程で、傳法の遺弟は自他宗を通じて數百人に及んで居るのであります。

す、御 鴻 恩

大師の御恩徳はこれまで述べた通りであります。今其中の大きな事柄だけを再び列記して見ますれば眞言一宗を興して即身成佛の利益を弘布め、混濁た宗界を清められたことはいふも更なり、諸佛諸尊の軌儀を定め、尊影を圖繪し佛體を刻み、弘仁式といふ建築の手法を示され、能書能文は大唐までも鳴り響き、悉曇を傳へ國字を發明し、施樂院を設け、普通教育の基を起されました。其の上筆紙墨から菓子の製法までも傳へられ、藥草を齎らし、茶を移植し温泉を發見し、石炭を採ることを始め、疫病を除き雨を降らせ、道を拓き橋を架け、魔物を退け、池を築き、堂塔伽藍の建立數多く、大部の本を著し、美術の發達を促すなど、一代の偉業は逆ても書き盡すことが出来ませぬ。一宗を開くさへ容易でありませぬのに、かくも諸方面に盡された大師の御力は鴻大無邊なものであります。

名門に生れて何不自由なき御身で、望めば立身出世も容易でありますのに、それを塵埃のやうに振り捨て、一生を萬民の救済と國家の鎮護とに盡されました。其恩徳は實に幾千萬年の後までも御蔭を蒙らぬものはありませぬ。大師の肉體は雲深い高野の奥の院に入定されましたも、大師の『世々國內に遍滿し、吾が影像の存する所、吾が名を稱ふる者には、如何なる所にも影向して利濟する』と仰せられた通りであります。

我々日本人は眞言宗と否とを問はず、この大恩人弘法大師を敬つて、一日もその鴻恩を忘れてはなりません。眞言は他宗と深い關係があるのでありますから、何人も常に『南無大師遍照金剛』の名號を唱へ、現在と未來との利益を求められよ。大師御一代の事跡はこんな小冊子では、ホンの一通りを書いたに過ぎませんから、皆さんは尙ほ一層進んで大師の事蹟や教旨や偉徳を御研究遊ばされんことを希望致します。

ありがたや高野の山の岩かげに

大師は今におはします。

弘法大師御傳 (をばり)

文明の母

作御師大法弘

(歌はろい)

ゑ	あ	や	ら	よ	ち	い
ひ	さ	ま	む	た	り	ろ
も	さ	ま	む	た	ぬ	は
せ	き	け	う	れ	る	に
す	ゆ	ふ	ゐ	そ	を	ほ
	め	こ	の	つ	わ	へ
	み	え	お	ね	か	と
	し	て	く	な		

(圖音十五)

ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
井	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	チ	シ	キ	イ
ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
ヲ	ロ	ヨ	モ	ト	ノ	ト	ソ	コ	オ

世の中が文明になつて便利な機械が追々と發明せられるので、誰でも新しく出来る者ばかりが便利で有益である様に思ひますけれども、爰に昔しの人の發明であつて、昔も用ひ今も用ひ此から後の人も用ひる者で、便利な事、有益な事に於て之に越す者は無いと謂はれる者が一ツあります。それは即ち文字であります。汽車や電鐵が便利でも、百里千里の遠方へ容易く旅行することが出来るといふだけで、百年千年の昔の日本へ旅行する事は出来ない、電信電話が便利でも、坐ながら遠方の人と話が出来るまでの事で、百年も千年も以前の人と話することは出来ない。而るに千里の遠方の人と話することも出来、百年も千年も以前の人の話を聞くことも出来、今から百年も千年も後の人に話をして聞かすことも出来るのは、偏に文字の力であります。唯そればかりでは無い、文字の力で、百年も千年も以前の人の思想を後に傳へるから、後の人はその思想を基礎にして更に思想を繼ぎ足して又之を後の人に傳へる。之に依て

人間の思想が次第に發達して行く譯で、世の中の宗教道德、政治法律、文學工藝など百般の事が、漸々に發達改良せられて來たのも、全く此理由に基く者であり、汽車、汽船、電信、電話の發明の出来る様になつたのも、亦全く此理由に依ります。依て文字は文明の母と申します。

サテ文明の母たる文字にも種々ありますが、日本固有の文字といへば「いろは」四十七字の假名と、「アイウエオ」等の五十音の假字とであります。此假字の無かつた時代には支那の漢字ばかりを用ひて居りましたが、漢字は數が多くて、書き方が六ヶ敷くて覺える事が六ヶ敷ので、トテモ上下一般の人々が用ひて便利を得るといふ事は望み難い事であります。ソコで「いろは」と「五十音」との假字が出来る事になつたのであります。此の假字が出来てからは、上下一般女子供に至るまで自由に讀み書きが出来て、便利と利益とを得る事になりました。サテ此の假字を作つた人は誰かと申しますと、即ち我が高祖弘法大師であります。依て高祖大師の降誕會に因んで御恩報謝の爲めに「いろは歌」と「五十音圖」とは大師の御製作に相違ない事を少々御話し致します。

一一『いろは歌』は高祖弘法大師の御製作なる事

四

『いろは』歌が弘法大師の御作といふ事は、確な證據が三ツあります
一には弘法大師の御友人の從五位下内膳正仲雄王といふ人が、大師に御面會の節、大師の御徳を御讃め申上げる爲に作つた詩の中に、字母弘三乗眞言演三四句といふ句があります。此が確な證據です。なぜなれば上の句に字母弘三乗とあるのは、字母とは梵字の事で、三乗とは佛法の事です。梵字は弘法大師が始めて日本へ御傳へになつた者で、大師は之を以て佛法を御弘めになつたから、その御功績を讃めて字母弘三乗といふた者です。次の句に眞言演四句といふのは、眞言とは歌の事で、我國では歌を眞言とも陀羅尼ともいふ事は昔から歌學者の中に其例の有る事で、今は『いろは歌』を眞言といふた者です。四句とは涅槃經の諸行無常等の四句の偈を指した者です。『いろはにはほへど、ちりぬるを』といふは諸行無常の意『わがよたれぞつねならむ』といふは是生滅法の意、『うるのおくやまけふこえて』といふは生滅々已の意、『あさきゆめみじゑひもせず』といふは寂滅爲樂の意です。此の四句の偈は僅に十六字で、一大佛教の甚深の義理を殘らず撮めてある所の難有經文でありますから、上下一般の人々女子供に至るまで佛法に結縁させる爲に、此意味を解り易く和けて『いろは』四十七文字の歌に御作りなされたのであります。この『いろは歌』が直に涅槃經の四句の偈の意味を解き演べた者であるから、眞言演四句といふて大師の御功績を讃められた者です。日本の人々の物云ふ音聲は四十七音であります、之を四十七音の外は無いと見極めを付けるといふ事が一ツの大仕事であるし、その四十七音を歌に綴つて無用な文字を一ツも入れないといふ事は亦是れ一ツの大仕事であるし、歌も事によりけり、田植歌や子守歌なら左程留倒もあるまいが、涅槃經の甚深の經文を僅か四十七字の中に詠み盡すといふ事は、實に一大事業と申さねばならぬ。依て仲雄王は此等の事に感じて眞言演四句といふ一句を置いて大師の御功績を御讃め申した譯です。先づ此が確な證據の一ツです

二には天台の恵心僧都の御説です。昔し冷泉天皇の皇后で三條太后と申す御方が、いろは假字で法華經を御寫しになりまして、南都北嶺の學者大德達を宮中へお召しになつて

五

法華八講といふ法事を勤めになりました。その時、清範、慶祚など云ふ學者達が替る
 高座に登り、法華經の甚深の義理を御說法になりまして、最後に叡山横川の惠心僧
 都が高座に登られました。その時一座の大衆何れも襟を正し耳を澄して居られました。が
 サテ惠心僧都の仰せに、日本國には『いろは』假字といふ結構な文字があるに依て如來所
 説の經文も皆此假字を用ひて書くべきである。この假字は弘法大師が支那に入て梵字眞
 言等の密教を傳へて御歸朝の後に御作りなされた者で、漢籍でも、佛法の御經でも、此
 の『いろは』の文字の外はない云々と初から終まで『いろは』の事ばかり御講釋なされて
 餘の事は何にも仰せられず、人々大に驚いて深く感服したといふ事です。この事は大江
 匡房卿の江談抄といふ書物に載つて居ります。惠心僧都は天台の大學者で、我が大師よ
 り僅に百年ほど後の御方であるのみならず、宮中で南都比叺の大學者の集つた時に斯く
 仰せられた事であるから、尤も信すべき事でありませう。此が第二の確證です。
 三には大師御眞筆の『いろは』が有つた事です。此は現今はモト亡びて傳つて居ないけれ
 ども、その摸寫といふ者が高野山にも、出雲國神門寺にも、大和國當麻寺にも橘寺にも

傳つて居ります。此等の摸寫は眞物の直寫しではなく疑はしい者ばかりでは有るけれ共
 もとく全く種のない者とすれば、三ヶ所も四ヶ所も同様に大師の御筆といつて贋物を
 作り出すといふ事は有るべからざる筈である。依て思ふに元は大師御眞筆の『いろは』の
 眞物が何處かに一ツ有て、其の摸寫が處々に傳つて居たに相違ないと思はれます。さす
 れば此も『いろは』が大師の御作といふ一の確證です
 右の通り『いろは』歌に就いては三つの確證があるから、我が大師の御作たる事は決して
 疑ふ可らざる事です。依て日々『いろは』の假字を用ひる現今の日本國民は擧て我が大師
 の御功績に對して深く御禮を申さねばならぬ事と思ひます

三 五十音圖も弘法大師の御作に相違なき事

『いろは』が我が大師の御作といふ事は大抵の人は知て居ますが、五十音圖も亦我が大師
 の御作といふ事を知らぬ人が多い様で、甚だ遺憾の事です。から、ザツと御話致します。
 五十音圖の作者に就ては、百濟の尼法明といふ人が對馬に來て始て佛法を弘める時に此

八
圖を作て人々に教へたといふ一説と、天平勝寶年中に吉備公(眞備)が作てオ井の二字丈は弘法大師が後に補はれたといふ一説と、我弘法大師が御作りなされたといふ一説との三説あります。併し初の百濟の尼法明の作といふ説は確な證據もなく用ひる人もありません、第二の吉備公の作といふ説は元と明魏の倭片假字反切義解といふ書にあるのが始で、徳川時代に伴信友といふ國學者の書た假字本末といふ書に此説を用ひて居り、其他にも此説を用ひる學者が昔も今も往々あります。併し此説も確な證據が無いのみならず五十音圖は全く梵字悉曇の學問から出た者で、悉曇を學ばない人の手では出來やう筈が無いのです。而るに吉備公は支那に渡つて音韻の學問を窮められた方で、音韻學の達人として有名な人ではあるが、天竺の梵字悉曇を學んだといふ證據は一ツも無い。随つて此の五十音圖を作つたといふ事は尤も疑はしい事であり、加之弘法大師がオ井の二音を補うたといふが如きは跡方も無い事で全く間違の想像です。水戸の大日本國史は正確を以て有名な歴史ですが、其の吉備公傳の中に五十音圖の事は一言も述べてありません、此は正確の證據が無いからであります。

次に第三の弘法大師の御作といふ説、此も正確な證據は無いけれども、最も道理ある説であります。何故なれば、五十音圖は前にも申す通り全く梵字悉曇に依た者で、アイウエオの五韻と、カサタナハマヤラワの九聲との十四音を根本とし、此から生じ來る所のキシチニ等、クスツヌ等の三十六音を枝末とし、此の本音と末音とを取り合せて一の圖に作た者で、豎にアイウエオと列ねるのは悉曇の摩多の順序に依り、横にカサタナハマヤラワと列ねるのは悉曇の體文の順序に依た者です。又カサタナハマヤラワの九音をアイウエオの五韻に配合させてキシチニ等、クスツヌ等の三十六音を生ずる方法も亦悉曇第八章の建立の體裁に依た者であります。サテ悉曇に依た者ぢやと言へば、此圖は何でもなく出來た者と思ふでしやうが、決してさうでない。多くの音聲文字の中からアイウエオの五韻と、カサタナハマヤラワの九聲とを取り出して之を根本の十四音と定めたといふ事が、非常なる大發見で、一通りや二通りの大學者ではトテモ出來ない仕事です。元來聲字の根本は十四音ぢやといふ事は涅槃經の字母品に説てある。けれども涅槃經には十四音を聲字の根本とすと説て、其の次

には直に五十字を説いてあるから、何字と何字とが十四音になるかといふ事は更に解らない、印度の大學者も支那の大學者も此事には非常に頭を悩まして種々の説を立た事で、叡山の安然和尚の悉曇藏といふ書の中には古來の異説を十ばかりも出してありますが、何れも誤つて居ります。又二三年前支那の大學者達が勅命を承て作つた同文韻統といふ書物の中には『舊傳十四音今失其傳』とありまして、支那では今に至るまで十四音のタナハマヤラワの九聲とが涅槃經に謂ふ所の十四音ぢやといふ事をチャンと見當を附けて、其を根本として圖を作つてあります。我が大師の御作といふは此處が目の着け處です。天竺の大學者にも解らず支那の大學者にも解らなんだ者を、弘法大師なればこそ、明かに經文の意を御發見なされて、直に其を應用して此の圖を御作りなされたのです、梵學を知らない吉備公などに、ナンデ此の離れわざが出来ます者か

斯様に申しても大師の御作といふ確な證據のない已上は、大師より前に誰か梵學を傳へた者が有て此圖を作つたかも知れず、大師より後に誰か作つたかも知れないと疑を入れ

る人もありまじやうが、そんな疑は無用です。何故なれば梵字悉曇の學は弘法大師が始

て日本に御傳になつた者であるから、大師より前の人が悉曇に依て此圖を作るといふ事は決して有るべからざる事である。又若し大師より後に作つた者があるとするれば、設へおぼろげながらも、書物か口碑かに其事が傳つて居りさうな筈である。而るにソナナ事は一ツもない。然らば大師より後の人が作つたでもない事は明瞭である

ソレナラバ大師の御作といふ事は云ひ傳へでもあるかといふと、それは有るです。野山名靈集に、大師御眞筆の片假字五十音圖は高野の講堂に秘藏してあると記してあります其の御眞筆といふ者、今は有りませんけれども、名靈集に斯様に記してある已上は元は有た者に相違ないです

然らば大師の御作といふ説を唱へた人があるかといふと、それも有るです。ズツト古い處は未だ取調が付きませんが、有名なる大阪の契冲阿闍梨の倭字正濫鈔にも名古屋の八事山の諦忍律師の以呂波問辨にも、五十音圖は恐くは大師の御作ならうと言うて居ります。此は元よりハツキリした説ではないが、悉曇を研究して思ひ當る事が有つたから云つた事で、根のない想像説ではありません。又近來に至ては文學博士黒川眞頼氏を始め

大内青巒居士なども、五十音圖は大師の御作とし、我が眞言宗聯合京都大學教授島山太郎氏の如くは多年間熱心に之を研究して、遂に我が大師の御作と定められ、七八年來熱心に此説を主張して居られます。又文學博士谷本富氏が一昨年我が大師の御誕生會の演説に同様の説を述べられた事は其時の演説筆記を御覧になつた御方は御承知の事です。要するに此頃は世間にも賛成者が大分に増加して來て、大師の御功績が漸々顯はれる事になりましたのは、誠に結構の事と存じます。

四 歸 結

已上述べた所で『いろは歌』と『五十音圖』とは共に我が弘法大師の御作といふ事は大概御了解の事と存じますが、此の『いろは』文字や『五十音圖』の片假字を用ひて書いた書物は古來今日に至るまでドレ程あるか、又此等の書物がドレ程日本の文明を開發せしめたかといふ事を考へて戴き度い。政治法律の書物でも、道徳倫理の書物でも、漢學の本でも神道の御祓でも、耶蘇教のバイブルでも、皆『いろは』か片假名かを用ひて居る。依つて

『いろは』と片假字とを取除けたらば日本の書物は九分九厘まで無くなるだらうと思ひます。小説や芝居の院本や淨瑠璃や端歌や、日々の手紙などは、皆假字を用ひる者であります。今忽ちに假字を取除けたらば、吾々日本人は日々ドレ程不便を感じ、ドレ程快樂を失ふでしやうか。此事を思ひますと、『いろは歌』と『五十音圖』とは誠に快樂の根本思想開發の基礎と謂はねばなりません。一口に云へば文化の母であります。サテ此の文化の母たる『いろは歌』と『五十音圖』とは我が大師の御作であるから、我が大師は日本文化の一大恩人と申さねばなりません。されば此の一大恩人の降誕會に際しては苟も日本人たる者は、上下貴賤の別なく、學者不學者の別なく、佛敎家と外敎家との別なく、共に赤誠を捧げて大師の御恩徳を感謝せねばならぬ事と存じます (終)

大正十一年七月十日印刷
大正十一年八月廿日發行

非賣品

著者 佐伯 宥 榮

發行者 代表者 三好 貞次

香川縣善通寺町弘法大師一千五十年記念法參會

印刷者 都村 精一

香川縣仲多度郡琴平町二三二番地

印刷所 都村有為堂印刷部

香川縣仲多度郡琴平町二三三番地

香川縣仲多度郡善通寺町六一五番地

不許
複製

發行所

法參

會

弘法大師御誕生一千百五十年記念

終

